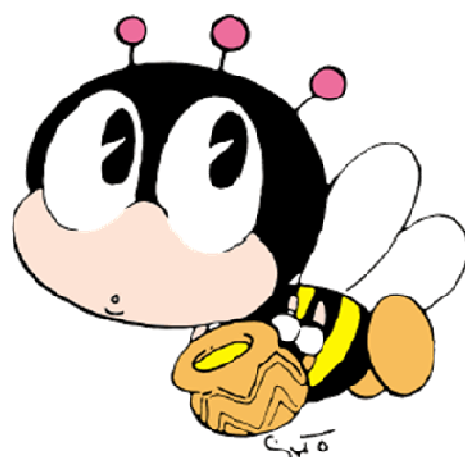


第59回 大月市生涯学習推進大会 報告書

日時 令和3年3月22日（月）於
会場 Zoomを使用してのリモート大会

【見つめ直そう！地域の力】
～呼び込もう！多様な視点～



まちづくり



ひとづくり

いつでも、どこでも、だれでも学べる
大月市教育委員会

第59回大月市生涯学習推進大会 実施要項

1. 大会テーマ 【見つめ直そう！地域の力 ～呼び込もう！多様な視点～】

2. 大会趣旨

地域資源や団体活動に関心を持つことで、多様な人材と共に実践を始めることが生涯学習のきっかけになります。大月の良さや課題を大月と繋がっている方々と共に発見し、学習することによって、地域に愛着を持ち、今後のまちづくりへの活用を目指すことを大会趣旨とします。
(コロナ禍で遮断されたこれからの世の中で、大月の人たちは内発的な力を蓄えていかなければならない。大月の良さをもう一度、再確認してPRしていく必要がある。)

3. 主 催 大月市教育委員会・大月市社会教育委員会・大月市公民館連絡協議会

4. 日 時 令和3年3月22日(月) 18時～

5. 会 場 Z o o mを使用してのリモート大会
一般参加者はなし

6. 発表会

生涯学習の実践と成果の活用、学習に踏み出すための情報の提供や交換から生涯学習への意欲を高める。

○コーディネーター

榎平龍宏 氏 大月短期大学教授

○発表者

藤井真弓 氏 (一社) メリーの会代表理事 「メリーの会の活動を通してのまちづくり」

務台祐太郎 氏 (株) エレクトロニクス代表 大月エコの里理事「棚田再生プロジェクトと大月の魅力」

小林愛香 氏、永田萌乃 氏 山梨県立大学2年生 「体験型観光のまちづくり」

坂本和彦 氏 大月市役所産業建設部長 「二拠点居住とグリーンワーケーション」

7. 時間設定	開会	18:00
	主催者あいさつ	18:00～18:05
	趣旨説明、コーディネーター・発表者紹介	18:05～18:10
	発表会	18:10～19:40
	・発表	
	・ディスカッション	
	・講評	
	閉会	19:40

推進大会 “さあ☆始めてみましょう!”

身近な伝統行事、文化活動等の地域資源を見つめ直し、
関心を持つことで「学び」を始めることが生涯学習になります。
それが生きがいや人づくり、さらに地域づくりとなり、
ふるさと大月を元気にすることに繋がっていきます。

本大会は、これからの大月の未来に繋がる地域社会を目指し、
新たな一步を踏み出す機会になればと思います。

★ コーディネーター 大月市立大月短期大学教授



まきだいら たつひろ
榎平 龍宏 氏

埼玉県生まれの長野県育ち。専門は農業経済学、地域経済論、経済政策。最終学歴は東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻博士課程単位取得。財団法人農政調査委員会調査研究部主任研究員、名古屋経済大学准教授、同大学院教授を経て、2017年に大月短期大学准教授、2018年より現職。主な研究業績として「都市・農村格差拡大の進行と農村地域経済振興」（生源寺眞一編著『改革時代の農業政策－最近の政策研究レビュー』2009年、農林統計出版）、「地域再生の理論と農山漁村」（小田切徳美編著『農山村再生に挑む－理論から実践まで－』2013年、岩波書店）等がある。現在は、地域経済循環、農商工連携、地域経済政策、地域経済振興・活性化に関する理論的・実証的研究を行っている。趣味は水泳、海釣り。

★ 発表者



ふじい まゆみ
藤井 真弓氏

(一社)メリーの会 代表理事 『メリーの会の活動を通してのまちづくり』

東京都渋谷区代々木に生まれ、3歳で大月に引っ越す。短大児童福祉科を卒業。20歳でロサンゼルスへ渡米、山野美容専門学校とビバリーヒルズインターナショナルスクールを卒業。30歳で帰国し、社会福祉協議会に勤める。その後退職し、市内で美容整体を開業した後すぐに発病。市からの支援で闘病生活を乗り切る。恩返しのため、産後ママの骨盤矯正を児童館で行い、多数の施術を行った。その中で食育の重要性を感じ、子育てママ達の支援を続ける。更には障がい者、がんママ、アレルギーっ子への援助といった活動を広げる。この活動の中で「一人も見放さない、見捨てないための地域社会づくり」を目指してきました。現在は他市とも交流を持ちながら子ども達の笑顔を大切にしながら活動を続けています。

★ 発表者



むたい ゆうたろう
務台 祐太郎氏

(株)エレクトロドリーム 代表 大月エコの里 理事 『棚田再生プロジェクトと大月の魅力』

平日は東京でITの会社経営、週末は大月エコの里を中心に活動中です。4年前に鳥沢山谷の民家を譲っていただき、二拠点生活が始まりました。本日は都心在住者が感じた大月の魅力についてお話しさせていただきます。現在は株式会社エレクトロドリーム代表、NPO法人おおつきエコビレッジ理事。大月エコの里では、棚田再生プロジェクトのほか、環境に配慮した家庭菜園の教室を運営しています。その様子をYouTube「自然菜園 LifeStyle」にて動画を絶賛配信中です。ぜひ、ご覧ください。

★ 発表者

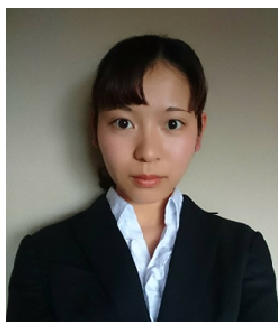


こばやし まなか
小林 愛香氏

公立大学法人山梨県立大学二年 『体験型観光のまちづくり』

私は山梨県大月市出身で20年間大月市に住んでいます。山梨県立大学のゼミの中で新たな形で大月市と携わる機会をいただき今回のような「桃太郎ガイド養成」についての発表に繋がる活動をしてきました。大月市民の私でも大月市のことで知らないことが多く、様々な活動の中で新たにたくさんのことで学んでいます。小さい頃から地域での活動や地域の人と関わる中で大月市はとても魅力のあるところだと感じています。そこで、この発表を通して今まで学んできたことや感じたことを学生目線と住民の1人としての目線でお話し出来たらと思います。よろしくお願いします。

★ 発表者



ながた もえの
永田 萌乃氏

公立大学法人山梨県立大学二年 『体験型観光のまちづくり』

山梨県立大学2年、永田萌乃と申します。私は山梨県の甲州市出身で、県内での観光によるまちづくりに関心を持ち、2年間ゼミ活動に携わって参りました。私の住む地域は市内でも特に山間部に位置し、若年層はおろか、住民自体が減少傾向にあります。決して「良い場所」ではない中でどのように生き残っていくかという状況で、大月での観光による地域振興は驚くべき活動でした。地域全体で活性化を図る姿や地域住民の熱量に対し、真摯に向き合わなければと感じ、「地域に対する思い」の重要性に気付かされました。今後は、学生という視点を織り交ぜながら活動に携わりたいと考えています。

★ 発表者



さかもと かずひこ
坂本 和彦氏

大月市役所産業建設部長 『二拠点居住とグリーンワーケーション』

産業観光課課長を経て令和2年度から産業建設部部長。

これまで人口減少や少子高齢化などの市の課題を解決するために、企業誘致や大月DMOによる農業や観光を通じた交流人口の増加を図ってきましたが、今般のコロナ禍の外出規制等により来訪者が激減しました。

逆に、これにより東京一極集中から地方分散へ人の流れが変わりつつあるなかで、大月が持つ豊かな自然や首都圏へのアクセスの良さを活かした「グリーンワーケーション大月」を推進し、テレワークによる移住やサテライトオフィスなどの新しい働き方、暮らし方を提案し、研究を進めています。

今ある資源と魅力を通じて大月の活性化につなげていきたいと考えています。

第 59 回大月市生涯学習推進大会 発表会記録

発表会開始

【榎平コーディネーター】

それでは、只今ご紹介いただきました大月短期大学の榎平と申します。

この生涯学習推進大会は、残念ながら昨年は開催ができなかったのですが、コロナの影響を鑑みれば致し方なかったのかなと思います。今こうやってオンライン上であれ、皆様方と繋がって再開し、そして開催できることについて非常にうれしく思っています。

コロナが世界中に蔓延してからほぼ一年たったわけです。戦後最大の経済的な落ち込みを私たちは経験しております。さらに、普段の生活ということを考えた場合に、ステイホーム、リモートワークさらには学生であれば授業がなかなかキャンパスで受けられない。こういった状況の中で、私たちは会いたい人にもなかなか会えなかったり、あるいは行きたいところに行けなかったり、学びたいこともなかなか学べない、こういうこれまで経験したことのない状況に置かれているわけです。しかし、地域という場はやはりこの生活というものが基礎になるわけです。これを止めるということはできないわけです。生活をしていくために、さらに経済を回していくために、地域ではさまざまな直面する課題に向き合い、そして取り組みさらにはアフターコロナを見通してさまざまな仕込みをしている状況だと思っています。私たちは、こういう地域が抱えている課題、さらには将来を見据えてさまざまな取り組みを尽力されている、こういったところに思いを馳せながら、そこから何を学んでそしてこれから何をしていけばいいかこういったことを考えて行くことが必要だと考えています。まさに現状から学びそして行動していく、生涯学習の面目躍如と言いますか、大きな役割を今こそ止めることなく動かしていく、これが求められていると思っています。そういうことで、先ほどご紹介いただいた地域で活動されている方、さらには大月の外から大月に来てさまざまな取り組みを実践されている方、そういったさまざまなルーツを持つ皆様方を、こちらにお招きしましてその取り組みをお話しいただきながらそこから何を学んでいくのか考える、そういった意義深い大会になっていけば私自身非常にうれしく思うわけです。そのために、コーディネーターとして尽力いたしますので皆様方のご協力をよろしくお願いしたいと思います。

それでは、先ほどご紹介のあった皆様方のお話を順番に 10 分程度となっておりますけれどもご報告をお願いして、そのあと三点ほど皆様方にテーマといいますか、論点をお示ししましてそれに対して皆様方からのご意見をいただきながら、さらに話しの中身を深めていくということをしていきたいと考えております。短い時間で大変恐縮ですがけれども報告者の皆様方にはご協力をお願いしたいと思っております。

それでは早速でありますけれども、最初にメリーの会の藤井真弓さんの方から取り組みのご報告をしていただきたいと思いますので準備の方よりよろしくお願い致します。

『メリーの会の活動を通してのまちづくり』

(一社) メリーの会 代表理事

藤井 真弓 氏

【発表者 藤井 真弓 氏（メリーの会）】

皆さんこんにちは。一般社団法人メリーの会代表理事の藤井真弓と申します。本日はよろしく願いいたします。

わたくしの会では、主に子育て支援と障がい者支援の活動に力を入れております。ふるさと大月に何か恩返しをしたいとの思いから当会を設立いたしました。今年で、ちょうど設立11年目を迎えます。当初は、小さな任意団体で市内のみの活動でしたが、次第にニーズが広がり3年前に一般社団法人化し、今では東京、神奈川へと活動を広げております。

それでは、これまでの活動の一部をご覧ください。

こちらは、薬膳教室となりますが講師には初狩の「じゅん庵」の三田村さんにお越しいただきまして、薬膳料理を教えていただきました。

次に、味噌作り教室ですけれども、笹子の天野和喜さんや大月市保健活動推進員の当時会長でした志村きよ子さんをはじめ推進員の皆様方にも大変お世話になり、今では私が味噌作りの講師になれるまでになりました。皆様方には感謝の思いでいっぱいです。完成した味噌の一部は、寄付金をいただいた皆様にお礼として差し上げております。

次に、老人大学の料理部のご協力のもと世代を越えた料理教室を開催いたしました。この時は、山日新聞の方にも取り上げられて大きな話題になりました。

次に、お豆腐作り教室ですけれども、浅利奥山隠居の山口操子さんを講師にお招きしまして、お豆腐作り教室を開催いたしました。作り立てのお豆腐を、何も付けずにプリンみたいとパクパク食べた子供たちが大変印象的でした。

社団法人化とともにメリーの会の八王子支部を設立いたしまして、アレルギーに対応したパン作り教室を開催いたしました。60万都市八王子とありまして、参加者も多くいつも抽選となっております。

こちらは、クリスマス会ですが、笹子の追分人形の斉藤久美子さんやメンバーのご協力で人形と触れ合う体験型にしたところ、子供たちが全員興味関心を持ち人形が壊れるかと思うくらい心配したほどの大盛況でし

メリーの会の概要

主な支援内容	主な活動	関係団体
- 子育て支援 - 障がい者支援	- 料理教室（食育、アレルギー対策） - クリスマス会 - 絵画造形教室・絵画教室・英会話教室 - 子ども食堂	- がんママCafe - 多摩アレルギーっ子の会 - アジアチャイルドケアリーグ（ACCL：ベトナム フェ） - やまびこ支援学校保護者 - もえぎ寮



薬膳教室

@総合福祉センター



味噌作り教室

@総合福祉センター



世代を越え料理対決
メリーの会VS老人大学

@総合福祉センター



お豆腐作り教室

@総合福祉センター



パン作り教室
(八王子支部)

@クリエイティブホール



クリスマス会

@大月市市民会館

た。

こちらが、夏休み絵画造形教室ですけれどもメリーの会の代表的な活動の一つになります。こちらは、学習無



料とありまして夏休みの課題であります、学校の宿題なんかをみんなでボランティアさんを集めて子供たちの支援をしておりますけれども、こちらは毎年好評で、夏休み中に 160 人のお子さんたちが参加しております。夏休みの子供食堂ですけれども、こちらは大変人気ですすぐに定員がいっぱいになってしまいます。食事はすべて手作りでアレルギーに対応しております、全員が同じものを食べられるように工夫して作って提供しております。

こちらは、障がい者支援活動でもえぎ寮のクリスマス会に参加したものです。メリーの会ともえぎ寮さんとの関わりも 8 年くらいになっております。

こちらは、やまびこ支援学校の生徒さんとの料理教室を開催した時のものです。宮谷にあった旧校舎には、調理実習室がなくて生徒さんたちは初めて調理実習をしたのですけれども、みんな真剣に取り組んで誰一人も無駄口をきくこともなく料理を一生懸命作ってくれました。完成した料理を見て一番驚いて感動していたのが保護者の皆様方で、目を真っ赤にしながら子供たちの作った食事をうれしそうに食べたのが大変印象的でした。

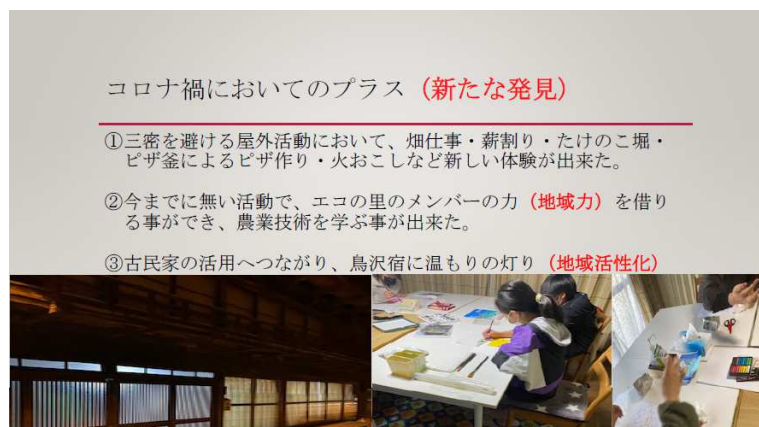


こちらが、がんママ CAFFE になります。こちらは東京都町田市になりますけれども、私は病気のママたちの子供たちへのサポートをしております。主に、幼稚園や学校、各行政機関への支援の手続きのサポートですが、時には崩壊しそうな家庭に入ることもあります。「ママはかいぞく」という絵本があるのですけれども、こちらの絵本は私が一番大好きな本で、がん教育をするには子供たちには一番適している本ではないかなと思ひまして、子供たちへの読み聞かせ、病気を持ったお母さんたちへの読み聞かせも、この本を使いながら子供たちのサポートをしております。

次が、多摩アレルギーっ子の会です。こちら、東京の方になってしまいますけれども、重度アレルギーの子供を持つ親の会で、アレルギー食の勉強と料理教室を行っております。大月エコの里で完全無農薬野菜を栽培して販売もしております。務台さんの棚田で作る幻のお米農林 48 号がございますけれども、こちらアレルギーの子供たちや離乳食にも使われ甘くておいしいと大変喜ばれております。こちらの絵本「いっしょのちがうもの」という絵本がございますけれども、この絵本は当会の小学生のアレルギーの子供をモデルにした実話で出版したものです。学校生活での先生や友達同士の理解が描かれております。お陰様で、教育現場でも取り上げられ増刷されております。今年で設立 11 年目を迎えますが、地域の皆様方のご支援ご協力があつたからこそ継続できたと思ひます。本当にありがとうございます。あらためまして、私たちの町、大月の地域力、地域の力、地域力を強く感じております。

続きまして、このコロナ禍においてのメリーの会の昨年の活動、今後にも関わってきますけれども、コロナ禍においてのマイナス部分というものが、まず3密を避けるために夏休みの学習支援と子供食堂を中止いたしました。このことによって、子供の勉強及び夏休み中に子供たちが行ける場所というものが無くなってしまったことと、食事の不安、これはコロナ禍において生活が大変な家庭もかなり多くある中で、食事の不安というものが上げられております。あと、メリーの会ではコロナ禍におきまして活動ができないということで、300キロのお米を集めました。市内での情報不足で数人の支援しかできなかったことは大変残念でした。母子寡婦福祉連合会やシェルターがある他市には簡単に支援することができました。このコロナ禍において一番ネックになってしまったのが、田舎という地域性が邪魔をしまして本当に困っている家庭が見つけれなかった、このデリケートな部分を今後どう解決していくかが大きな課題となっております。

次に、コロナ禍においてのプラス面です。これは、新たな発見ということでこのコロナがあったからこそ発見ができたというプラス面です。3密を避けるための屋外活動において、畑仕事や薪割り、竹の子掘り、植菌体験です。椎茸の植菌体験や収穫、ピザ窯によるピザ作り、火起こしなどの新しい体験が子供たちと一緒にできました。今までにない活動で里山活動を行うことで、エコの里のメンバーの力を借りることで、農業技術などを指導していただき地域力の大切さを学ぶことができました。公共施設の閉館により古民家を借り活用することで、周囲の方々から大変喜ばれ地域の活性化にも繋がりました。今後の活動について、コロナ禍が終息したとしても、新たな生活様式の中での活動になると考えられます。3密を避けながらの活動となり、屋外活動を増やすなどの創意工夫し、今後も皆様の力を借りながら地域力で子育て、障がい者支援に取り組んでいきたいと思っております。以上です。ご清聴ありがとうございました。



【榎平コーディネーター】

藤井さんありがとうございました。今のお話ですが、さまざまな地域には匠と言いますか、技や知恵を持った人びとがたくさんいるわけですが、そういった人たちの技や知恵を子育て支援に活かしてくという、この発想のもとで取り組みをされてきたと思います。そういった中で、地域の良さですとか魅力というものを、また人の温かさも含めて子供たちにそういう取り組みを通じて学んでもらうという、これは本当に生涯学習といいますか地域学習の非常に重要な取り組みだというふうに思っています。先ほども、コロナのことでさまざま課題があるということをおっしゃっている中で、非常に印象的だったのはやはり子育てというものを地域で行っていくことが、非常に大事だとよく言われるのですが、なかなかこれは難しいわけです。一番難しいところは、子育てというものがあまりにもプライベートなテーマであると、それぞれの家庭の事情に応じてやっているものなので、それを外からいろいろと口を出すというのはなかなか憚られる、そういった大きな障害があると思います。ちょっとお聞きしたいのですが、それぞれの家庭のプライバシーというものが特に今ことさら強く言われているなかで、こういう活動を進めて行く上で個々のプライバシーというものを守りながら、しかしそこに支援をしていくというこの率直なところ藤井さんなりの考え方をお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

【発表者 藤井 氏】

私で手に負えない場合には、行政の子育て支援課に相談に行っております。子育て支援課に言えないプライベートな部分というものは、私で納めるしかないですし、逆に外にはソーシャルワーカーさんや精神科医の先生たちもいらっしゃるので外に出すこともあります。その家庭の事情により、外に出す場合と中に持っていく場合と中間の役目が私のなかではあるのですが、やはりその部分が一番難しいところです。

【榎平コーディネーター】

やはり、メリーの会だけで完結する話ではないということですね。行政も含めたサポート体制というものがしっかりと整っていくなかで、やって行かないと当然メリーの会の藤井さんだけでは限界性があると、しかしそのできる限りのことを藤井さんですとかスタッフさんお母さんたちとの信頼関係の中でできる限りのことをやって行って、しかしそれでもなかなか難しいことについては、行政等のサポートネットワークというものが必要だというそういうステップが必要だというふうに今話を聞いて感じたところです。これは、どんな場面においてもきっと必要なのところだと思います。地域でできることをとにかく頑張っ、しかしそれがコロナにぶち当たったなかで行政等のサポートが必要だということだろうと思います。どうも大変興味深い話をありがとうございました。

続いては、東京のIT企業の社長さんであります務台祐太郎さんにお話を伺いたいと思います。今日も大月エコの里さんからリモートで参加していただいておりますけれども、大月エコの里さんとのコラボレーションについてぜひお話を聞かせてください。よろしくお願いいたします。

『棚田再生プロジェクトと大月の魅力』

(株)エレクトロドリーム 代表 大月エコの里 代表

務台 祐太郎 氏

【発表者 務台 祐太郎 氏（大月エコの里）】

それでは、始めさせていただきます。私の方からは、大月の魅力と棚田再生プロジェクトというテーマでお話させていただきます。株式会社エレクトロドリームの代表をしております務台と申します。そして後ほど説明させていただきますが、今は大月エコの里のお手伝いをさせていただいております。そして理事という形でも活動しております。

最初にまず簡単に自己紹介ですが、私は1970年生まれで50歳ちょっとという感じでございます。実は東京の江東区に普段は住んでおりまして、もともとは週末だけ大月に来るとそんな生活しておりました。今はコロナ過で完全に仕事もフルリモートワークとなりまして、週の半分は大月にいると、残りは東京にいるとそういった形でございます。もともと小さい頃から所謂パソコンおたくで、本当に家から一歩も出ないインドア派だったのです。それが大月のことを知って、大月に通うことによってすっかりアウトドア派になり、田んぼだったり畑だったりするようになり正直人生が一変したなと思ったりします。

普段は、ウェブ制作とかスマートフォンのアプリ開発をするITの会社をやっています。例えばなんですが、こんな会社の仕事を紹介させていただきます。ホームページの作成、アプリの開発をしております。中島みゆきさんというアーティストのホームページを作ったり、スマートフォンのアプリですとお互いの位置が共有できるようなアプリ「ココイル」というアプリを作っています。

そんな私がなぜ畑、田んぼ、そして大月エコの里を知ったかのお話をさせていただきます。もともと2013年ですか少し前です。県の農政部が主催する企業と農業者を結ぶチームツアーというのがございまして、たまたま大月エコの里に訪問したのがきっかけです。実はお邪魔したときは、ウェブカメラがあったりiPadがあったり光回線がここにはあって、非常に興味を持ったのを覚えています。貸し農園がありますとの告知を見つけて、たまたまですが私の会社には結構畑に興味を持つ社員が多かったのです。東京に住んでいるからこそやっぱり畑をやりたいと思う人、今もそうだと思いますがとても

大月の魅力と 棚田再生プロジェクト

株式会社エレクトロドリーム 代表
大月エコの里 理事

務台祐太郎

自己紹介

務台祐太郎 1970年生まれ 平日東京在住 週末大月生活

中学時代からずっとパソコンオタク、
好きが高じてソフト開発会社に就職し、
2001年に独立

Web制作やスマートフォンの
アプリ開発を行う
ITの会社を設立し現在21期目。

大月に来るまで、
週末も家から一歩も出ない
インドア派。

それが
現在→



会社の仕事

ホームページ制作・アプリ開発



会社の仕事

自社アプリサービス

お互いの位置が共有できるアプリ
「ココイル」



大月との出会い

2013年10月に山梨県農政部が主催する、企業と農業者を結ぶ大月バスツアーに参加し「大月エコの里」を初めて訪問。

敷地内にWebカメラ、
センサー、iPad、光回線インターネットが
導入がされていて興味を持つ

「貸し農園あります」の告知を見つける

畑に興味のある社員がいた
ことと、エコの里の年配の皆さんの人柄にも
触れたことで、管理付き貸し農園の形態
で契約。
「おおつきベース」と名付ける。



増えていると思っています。そんなことで、まずは大月エコの里の貸し農園を会社でお借りするということからスタートしまして、みんなに「おおつきベース」と名前を付けましてまずは通い始めてというのがスタートです。この大月エコの里は、自然豊かで農園があったりバーベキューができたり、貸し農園、ピザ窯、ログハウス、そして椎茸植菌の原木です。こんな大きい椎茸があったりして、会社のメンバーでここに来ては畑をやって、そのあとバーベキューを楽しむとそんな僕らにとっては

本当に新しいライフスタイルが始まったなと思っています。ただ最初は、正直言って農作業とか全然できませんので、本当にこの皆さんに手取り足取り教えてもらいながらこんな感じに家族でお邪魔しては、一からやり方を教えていただいたのがスタートです。本当言うと都

心のメンバーからすると採りたてのヤマメ、それからスイカ、スイカ割をやったことのない東京の子供たちが結構多くて本当みんな来て喜んでいきます。地元の桂川のアユとかいただいて少しずつ仲良くなっていったなと思っています。田んぼの稲刈りをみんなやったということは今では懐かしい思いです。本当、第三のふるさとではないですが、なんだか凄く愛着が沸き始めた頃がこの頃です。そのあと、仲良くなってきたところで、私がエコの里の近くに民家を譲っていただきました。これがやはりきっかけとしては、とても大きいまた新しいライフスタイルだったと思っています。この拠点を持つことで二拠点生活が少しずつ始まって、会社のメンバーで来てはここを仕事場にしようということも進んでおります。特に農作業、金曜日の夜にこっちに来て早朝に農作業をするということができるようになってから、より大月に通うようになりました。通い始めると大月の方からは何でそんなにここに来る変わり者なのかなとよく言われたのですが、私から見る大月の見え方と地元の方からする見え方は結構違うなと思っています。私は、東京から車だと 70 分くらいで来られるのですが、

大月エコの里

・貸し農園 ・ログハウス
・BBQ ・ピザ窯

敷地約10ヘクタール



これまでの活動内容

2014年4月 まずは会社で貸し農園を借りる

貸し農園での農作業
当初は月1回程度訪問し、エコの里のアクティブシニアのみなさんに手取り足取り教えてもらいながら野菜を育てた。



これまでの活動内容

はじめての収穫イベント&BBQ
山のようなスイカとエダマメの収穫
地元の鮎、ジビエなど堪能。



これまでの活動内容

その後、秋冬野菜、蕎麦づくりなどエコの里のイベントへの参加、稲刈り体験など定期的に訪問を継続。家族ぐるみの参加が増える。

畑や田んぼの面白さを知る。



一すっきり愛着が湧いて、第2のふるさとに。

これまでの活動内容

仲良くなってきて、
エコの里の近くに、
築30年、土地80坪、床面積40坪の民家を譲ってもらう
2拠点生活、サテライトオフィス化を進行中。

特に夏は金曜日の夜に行って、
涼しい早朝に農作業を開始。

「おおつきのいえ」と名付けて
会社関係者、友人にも解放。

リモートワークもあり
いつのまにか、
週の半分は大月に。



「魅力」に関する 地元と都心在住者の感覚の違い

地元の見え方——私の見え方

「都内から移動が大変」 → 「70分なら通勤と変わらない」
「市内の交通の便が悪い」 → 「手つかずの自然や里山」
「人がなくて寂しい」 → 「人が少なくて静か」
「人見知んな地元の人」 → 「味のある素朴な人柄」
「畑と年寄りばかり」 → 「だれもが畑の大师匠」

「大月には何にもない」、そんな事はありません。

都内から移動が大変とよく言われますけど、実は都心から 1 時間ちょっとくらいの通勤で皆さん普通にやっていたりするのです。それくらいで、ここまで来られると別にそんなに遠いという話ではないのかなと思ったり、ここも鳥沢駅からちょっと距離があるのですが、その反面、実は家から 5 分歩けば扇山に登れたりとか、人気が無くて寂しいと言いますが、私にとってはその人気が無くて静かなことがすごくいいことだと思っています。他にも、畑とお年寄りばかりと皆さん言いますが、私からすると畑をやりたくて来ているところがあるものですから、地元の方と私のような都心から来た者の見え方はだいぶ違う、たぶんその辺りが魅力にも通じるところがあるのかなというふうに思っています。私からしたら、大月には何も無いってことは決してないと思っています。

2014 年を最後に、大月エコの里の人手不足もあって休耕田になってしまいました。こんな感じでどんどん草が生えていってあまりほったらかしにし過ぎるのもよろしくないとお聞きしました。とにかく、手が足りないということでもう一回棚田を再生しようと「棚田再生プロジェクト」を結成させていただきました。ただ、普通に今までのやり方でやるのではなく、どうやったら都心から特に若い人たちに来てもらいたいと思っておりまして、いろんな工夫を考えました。なるべく、手作業であえて手間を楽しむような昔ながらの足踏み脱穀機とか唐箕とか昔の機械があったものですからそういったものでやってみようとか、やはり都心の人は安全性に配慮したオーガニックであることにすごく意識もありますので、無農薬、無化学肥料でやってみる、それから、せっかくなので地域ではやっていない珍しいお米を作ってみようということをやりました。そうすると最初 5 枚の棚田の内 3 枚をまず復活させて、なるべく無農薬、無化学肥料、そして米もいろいろな種類を作ってみて一

番どれが合うのかなということをやってみました。結果的に「農林 48 号」っていうこれも珍しいお米なのですがこれがこの地ではすごく合って、これをこの後育てるということに決めました。こんな感じであえて昔ながらの手法で私自身は代掻き畔塗り、地元の方はあつとい

地域の魅力を感じ始めた頃、2014 年を最後にエコの里の棚田は手が回らず、休耕田に。

美しい棚田は里山の象徴だと思っていたので、なんとか、復活、出来ないかと、考えました。



休耕田になった理由とにかく手が足りない

解決策：

- ・人数が必要なときは都心からメンバーを呼ぶ
- ・水の管理だけは地元のメンバーにお願いする
- ・とにかく自分が最初に手をあげる

地元メンバー＋都心メンバーで

「棚田再生プロジェクト」
結成



やるために工夫したこと

- ・都心の若い人が興味を持って来てくれるようにしたい
→「できることはなるべく手作業で。手間を楽しむ」
- ・「エコの里」にふさわしい環境と食の安全性に配慮した米作りをしてみたい
→「無農薬・無化学肥料」「自然農法」
- ・販売も見越して、他にはないお米を作りたい
→「珍しいお米の品種を育てる」

2017 年 棚田再生プロジェクト始動

- ・5 枚の棚田の内 3 枚を復活
- ・自然農法に準じて除草剤なし、米ぬかのみ
- ・初年度は、多品種を育てて
大月の土地と農法に合うものを探す
- 「トヨサト」「農林 48 号」「ササニシキ」「コシヒカリ」

2017 年 種まき～代掻き



畔塗り



休耕田が、再び水田に戻る。



田植え



除草



出穂



う間に簡単に畔塗りができるのですが、私は4年目ですけどいまだになかなか難しいなと思いました。こういったことを地元の皆さんに手取り足取り教わりながら、何とかここまできて眠っていた棚田に水が入って、こういうきれいな風景が復活したときはなかなか感動いたしました。田植えは、大月短大の皆さんと実習という形一緒にやりますので、地元の若い方から年齢の垣根を越えて、そして都心と大月のみんなでやるそういう垣根が取れて一緒にやるのがすごくいいところかなと思っています。あとは、昔ながらの除草も無農薬が多いものですから除草が必要なのです。これも地域の方から見るとそんな昔のやり方をやっていてビックリされることもあるのですが、これ自体が都心から来たメンバーからすると結構楽しくやっています。「出穂」この字も読めなかったのです。雨の中の稲刈りとか、都心から来るメンバーは大体土日しかできなかつたりするので、天気との難しい所があるのですがこんなこともいい思い出です。そして、脱穀も昔ながらの手であえてやっております。本当にいろんな方の多くの手間と時間を掛けて、こういう形で無事に米ができて取れた時は本当に涙がでました。せっかく私たちは東京から来ていますので、東京で実際に作ったお米の販売なんかも試してやってみたりとか、それからせっかくの場所でしたので私の稲作の師匠でもあるのですが、タケシさんという家庭菜園の方を呼んで農業教室の場として大月エコの里を活用させていただいたりしました。

そして、これも大きなことだったのですが YouTube でいろんな活動を情報発信しました。これによって、大月エコの里に興味を持っていただいて実際足を運んでくれたりとか、貸し農園を借りてくれたりだとかそういったことに繋がっております。ところが、2020年のコロナによってリアル開催イベントが難しくなりました。どうしたものかと、なかなか悩んでいた時期もあったのですが、とにかくオンライン化して行こうとネットにどうやって対応して行けばいいかってことを考えました。これは本当に自分達が得意でもあること、足元はITですのでまず農業教室をオンライン化ということをやりました。実はそれによって、全国から申し込みができるようになったという大きなメリットがあります。SNSを活用してネ

立派に育ちました



色々ありましたが、無事に収穫。



脱穀



たくさんの方のひとと、時間をかけて、「いのちを」いただきます。」



東京ではお米の販売も挑戦



稲作の農業教室の場として



YouTube発信

大月エコの里をフィールドに自然や里山、田んぼや畑の情報をお伝えしています。



2020年、コロナによって変わったこと

- ・リアル開催イベントが難しくなった

対応策

- ・農業教室→オンライン化
全国から申込がくるように。
- ・対面販売→SNSを活用した
ネットショップにて販売

ットでお米を販売することもやってみました。屋内での座学といわれるホワイトボードとか使ってやることはzoom というまさにこの配信がそうですけど、これで全国に配信する形を取りました。屋外では、動画を撮影し後日皆さんにお届けするというのをやって本当にこれによって近隣の方だけでなく、全国、場合によっては海外からの申し込みがあったりしたので、すごく広がったなと思っております。そして、お米のテスト販売というケースで、これはSNS とかネットを使って売ってみました。ただ、お米を売のではなくみんなでバケツリレーをやってみようという切り口にしてバケツリレーをやるための種粃10粒、試食用白米1キロだけつけて、あと田んぼの土を皆さんのバケツの中で一緒に混ぜて使って2,000 円くらいで販売しました。これは本当にすぐに売れてビックリしました。ただお米を売のではなくて切り口を変えて、何に価値があるのか考えてやること。それから最後はやはり YouTube とか SNS で全国に向けて価値がわかる人は必ずいるので、その方にどうやって届けるかをやることでまた広がるってことを実感いたしました。そんな経験からコロナ過ではございますが、逆にコロナ過だからこそできることを大月エコの里ではいろんな挑戦をしております。今度は、里山管理塾でいろんな課題が見えてきたのですけれども、どうやって里山を管理していけばいいか少しずつ私も学ばせていただきました。ここもやはり、棚田と同じで人手が足りていないと思っています。だけど、必ず全国にはこういったことに興味がある人はいると思っています。なので、ここでやっていることは今どんどんネットで動画配信する準備をしております。それでまた興味を持った人が、まずネットで知ってもらってそのあと実際に足を運んでもらうということができればなというふうに思っております。

まとめになりますが、アフターコロナ時代の
大月の価値って何だろうと思っているのですけれども、一番これから世の中が変わるのは仮にコロナが終わったとしても完全に元に戻るのではなくて、リアルでもオンラインでもどちらでも自由に選択できる世の中になるのではないかなというふうに思っています。私も大月から全国にこういった活動を発信して、発信することで必ずその価値を理解してくれる人が全国のどこかに必ずいると思っています。それを今すごく実感しているので、まずは関心を持っている人に届ける。関心を持ってもらったら、今度は足を運んでもらいたいと思うのですが、この時にやはり大月の都心からの距離の近さってのが、本当に大きな他にはない強みであって、大月の価値の

エコの里の農業教室のオンライン化 農業スクールのオンライン化

室内ではZOOMによる講座の配信



田んぼでは動画撮影をして後日配信

コロナ時代のSNS活用による販売

「エコの里のお米テスト販売」

無農薬無化学肥料の幻の米農林48号ですが、地元では、1kg500円でもなかなか売りづらい・・・？

→バケツ稲+お米試食セット
・種粃10粒
・試食用白米1キロ
・田んぼの土100g
を2000円で販売。
計40セット即完売

価値の創出+SNS、オンラインでその価値を分かる人に届ける事



オンライン時代にむけた挑戦

大月エコの里 挑戦中
「里山管理塾」をネットで全国へ



興味のある人を
全国から発掘！



さいごに

<アフターコロナ時代の大月の価値>

コロナ禍が終わっても、もとに戻るのではなく、「リアルでも」「オンラインでも」という自由に選択できる世の中に変化したのだと思います。

大月から、全国に情報を発信し、まずオンラインで存在を知ってもらうこと。その価値を理解してくれる人は必ず存在します。

そして、関心を持ってもらい、実際に足を運んでもらう時に、大月の都心からの距離の近さが、他にはない「強み」と「価値」になると思います。

一つかなと思っています。これからちょっとコロナがどうなるかと思っているのですが、ある意味コロナがきっかけで新しい取り組みってことにたくさんチャレンジできたかなと思っています。それが非常に役に立っておりますので、それからもいろんな活動をしていきたいと思っています。少し長くなりましたが、私からは以上です。ありがとうございました。

ご清聴ありがとうございました！

【榎平コーディネーター】

務台さんありがとうございました。これまでの自分ライフスタイルとは、ガラッと変わった生活をこの数年間送られているということですよ。やはり人間ってみんなそうだと思うのですが、自分の今いる場所だとかあるいは生活もそうだと思いますし価値観もそうなのですが、自分のそのいる場所と非常に遠い所への憧れと言うのかよく遠隔解除性なんて難しい言葉で言いますが、遠い所への憧れは人間誰しも持っているのだけれども、もちろん旅行ですとかこういう非日常を味わうというこういう形の中でずっとそういうものをそういう欲求を実現していくのだと思うのですが、いかにせん生活を変える働き方を変える住むところも含めて変えていくことは非常に大きなハードルがあると思うのです。またさらには、そこに行くことによって新しい人間関係ですとかそういったものが生まれてしまうと、先ほど垣根という言葉がありましたが非常に象徴的な言葉なのではけれども、こういったものをどう越えていくのかさまざまな課題があってそういうことが実現できた人というのは、本当一部の人なんじゃないかと私たちにはあまり関係のないことなんじゃないかとゆとりがある人余裕がある人だからこそそれができるのではないかと、半ば憧れと言いますかあるいは諦めと言いますか、そういった感情を持っている人が今お話しされたようなことを聞いて思う方ってきつといらっしゃると思うのです。しかし、できればあるいはあわよくば実現したいこういう人たちがいるなかで、例えばこれから務台さんに続けたいという人がいるとすれば、そういった方々に何かメッセージというものがあればぜひいただければと思うのですけれどもいかがでしょうか。

【発表者 務台 氏】

はい、今の話を聞いて思ったのですが、確か今もう私の生活はガラッと昔は想像できなかったし、本当に自分の理想に近づいているのですが、最初は年に何回か電車を通ったりそこからスタートだったのです。少しずつそれが増えてきて、今では半分こっちにまさか家まで譲っていただけとは思わなかった。最初は普通に何回か通うってところからスタートだったので、そういう意味ではそれができる大月ってことでこれが移住しないといけないことだったらその選択は難しいと思うのですが、それができるこの近さと私たちを受け入れてくれた NPO 法人大月エコビレッジさんみたいな存在があったことなのかなと思ったりします。

【榎平コーディネーター】

はい、そういった経験を通じながら価値観の同じような人こういった人たちと繋がっていくような、そしてコロナでいろいろな影響あったと思うのですが、そこで SNS とか YouTube 配信を通じて価値観の同じ人たちと繋がって行く。こういった展開がみられたのは、コロナの影響が一つはあろうかと思いますし、それを機会としてどう活かして行くのかってことについては本当にまさにチャレンジされているところだと思いますので非常に参考になったかと思います。どうもありがとうございました。

続いては、今度は山梨県立大学の学生さんからお話をいただきたいと思います。なかなかコロナで大学生活も大きく変わったと思うのですが、そういった中で決して血抜きにならずに地域の外に目を向けてそして自分たちにできることが、何かないのかということで取り組みをされている、二人の学生さん小林さんと永田さんから取り組みについてお話しいただきたいと思います。準備の方よろしく願いいたします。

『体験型観光のまちづくり』

公立大学法人山梨県立大学二年

小林 愛香 氏

永田 萌乃 氏

【発表者 小林 愛香 氏、永田 萌乃 氏（山梨県立大生）】

こんにちは、桃太郎養成ガイドについて発表する小林愛香と永田萌乃です。よろしくお願いします。

まず初めに私たちの自己紹介をさせていただきます。私は山梨県立大学2年の小林愛香です。出身は大月市初狩町です。私は同じく山梨県立大学2年永田萌乃です。出身は、甲州市です。

私たちは、ゼミ活動で大月市での活動に携わってきました。1年次は、大月市はイベントや用事がある際に通るところであり観光に力を入れているイメージはありませんでした。そのため、大月市が桃太郎を基礎にして観光で町おこしを図るということを聞いたときはまさに寝耳に水でしたし、まったくイメージができませんでした。

ここで私たちが学んできた大月桃太郎伝説と

は、こういったお話なのか簡単に話させていたいただきたいと思います。大月にはいくつかの桃太郎伝説にまつわる地名があります。桃太郎の仲間になる犬、猿、鳥は、それぞれ犬目、猿橋、鳥沢で仲間になったとされています。また、桃太郎が生まれた桃は百蔵山の桃が落ちていったものと言われています。その中でも大月桃太郎伝説の一番の特徴が、鬼が桃太郎に殺されたのではなく、自分から死んでしまったという点にあると思います。ここが大月ならではのポイントだと思います。そんな鬼は九鬼山で生まれ、悪事を働いていたことから桃太郎に追い込まれて岩殿山に逃げてきたそうです。それでも逃げ切れなくなった鬼は反対側にあった徳巖山に足をかけたところ股が裂けて死んでしまいました。皆さんはこの内容の大月桃太郎伝説をご存じでしたか？私たちはこの活動に参加するまでは聞いたことがなかったため、大変驚き、興味を持ちました。

これらのイメージを持って大月での活動を始めました。私たちは一昨年の11月17日にJRさ

桃太郎ガイド養成

～学生から見る大月の力～

自己紹介

・小林愛香
山梨県立大学2年
大月市初狩町出身



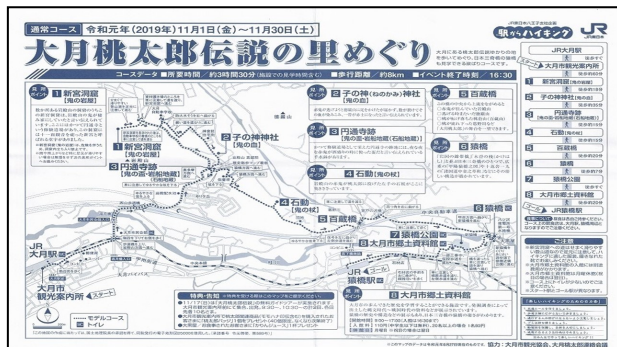
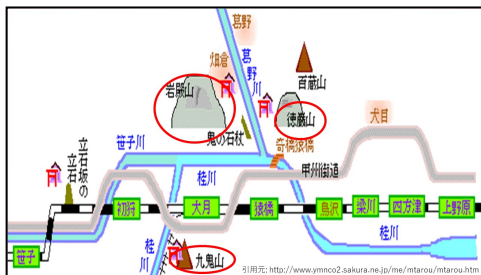
・永田萌乃
山梨県立大学2年
甲州市塩山出身



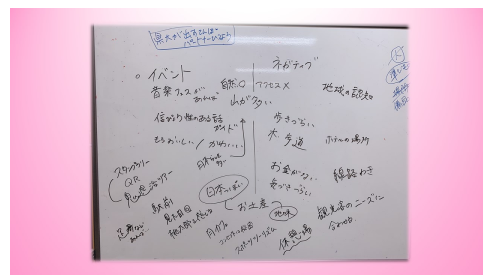
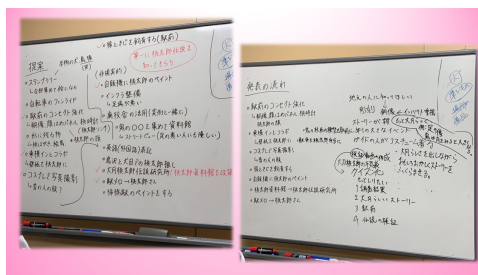
大月×桃太郎??



犬 猿 鳥
|| || ||
犬目 猿橋 鳥沢



んとタイアップして行われた「大月桃太郎伝説の里巡り」に向けて活動を行ってきました。山梨県立大学で行った話し合いでは、主にどのように桃太郎伝説を

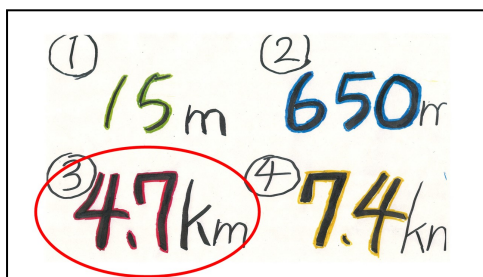


知ってもらおうかということや実際に企画を練っていくうえでどのような形で桃太郎を使ったイベントを創始していくかを話し合いました。また、ツアーの中で行うクイズ作りも学生で行いました。

大月市で行われた「地域案内人養成講座」では、地元の方と意見交換をしました。もともとある観光資源、例えばトレッキングや私たちも訪れたことのある奈良子の釣りセンターなどの自然を使ったアウトドアと桃太郎の観光資源、猿橋や岩殿山などのどちらに重きを置いてツアーを計画すべきか、歩きながらどのようにそれらの魅力を来訪者に伝えていくか、難しさを感じました。ツアーを企画する側に立ってみると、簡単ではないことがたくさんあると感じました。またこのような話し合いで、ともにツアーのことを考え意見を出してくださった地元の方の真剣さと、地域への愛着の強さを感じました。



ここでの話し合いを重ねて、実際に大月桃太郎伝説の里巡りという名称でツアーを行いました。当日、私たち山梨県立大学と大月短期大学の学生はガイドを務める地元住民の方のサポートをしました。ここで自分達で作ったクイズを出しました。出した問題は、「鬼の身長はどれくらいであったか」でした。ちなみに皆さんはどれが正解だと思いますか？答えは三番の 4.7km でした。



私たち学生が計算して出したものですので、事実とは異なるものですが、参加してもらった方々には良かったよという声をたくさんいただきました。普段は何気なく通っていた道も桃太郎伝説の地として地元の方ではない人たちが楽しんでくださったことにとても嬉しく感じました。当たり前にもわりには自然があって自然＝観光資源になるという可能性を考えた事がなか

“達成感”

ったため、自分にとって大変刺激的でしたし、ゼロからこの活動を行い、ツアーを終えることができたことへの達成感を強く感じました。

一年間を通して大月に関わってきて、地域の人たちの地元への愛着というものを強く感じました。そんな地元の方々の話を聞いたり、実際に歩いてみる中で自然の美しさであったり地元の人だからこそ知る場所の面白さというものがあると思いました。大月は魅力のある土地ということに気づくことができたのではないかと思います。その魅力をツアーの中で、観光という側面で支え、大月を発展させていく基盤にできたのではないかと思います。また、ガイドという立場になることで、自分達の知識が必要であるということを感じました。この活動に携わるまで、大月に関しての知識はほぼゼロの状態でした。活動に参加する中で、徐々に知識だけでなく興味や関心も高まっていきました。そして、それを知ったからこそ、この興味関心を多くの人たちに伝え、守っていきたいと思うようになりました。ツアーに参加してくれた人たちがガイドを通じて大月のことを深く知るためには、私たち学生だけでなく市民や地元の方が大月について、またその魅力をうまく伝えていく方法を学び、関心を持たなければならないということも学ぶことができました。一部の人間だけでは限界があり、だからこそ地域全体で取り組めるような体制づくりが必要になるのではないのでしょうか。まずは知ること、誇りをもって多くの人に大月のすばらしさを広げていくことが可能になります。

去年は、コロナウイルスの影響により満足に活動が行えない状況でしたが、山梨県立大学ではこのツアーを踏まえて大月短期大学の学生さんに向けて講義を行いました。この活動を通して、大月に拠点を置く若者に知識を深めてもらう足がかりにしていこうとこの活動を行いました。私たちが実際にガイドを行ってみての考えだけでなく、大月桃太郎伝説の紹介や他地域の物語との比較、また桃太郎を活用した観光やプロモーションの比較等をオンライン上で作成し、講義をしました。桃太郎伝説について全く知らない人に対し、講義を通してどうすれば桃太郎の知識を深めつつ、大月について伝えら

“地元愛”

大月の魅力



観光での大月発展の支え

地元の人が『知る』ことが必要

去年の短大でのオンライン講義

•全体で三時間

- 一時間目：大月桃太郎の定説、比較
スポット紹介
- 二時間目：大月桃太郎のプロモーション
(他地域比較)
- 三時間目：大月桃太郎伝説ガイド



れるのかを常に念頭に置いて教材を作成しました。同じ学生という視点から自分達にはなかった発想を得ることができて、伝えるだけでなく、自分達自身も勉強することができました。さらに、オンライン講義を通して、新たな刺激を求める学生だからこそ発見できる新しい大月の魅力がありました。学生に対して質問を投げかけた際に、学生一人ひとりの解答の質及び量に大きな差が生じていたと感じました。これは一人ひとりの大月観光に対する熱量や考え方に違いがあり、この違いが大月の観光発展の妨げになっていると感じました。また、斬新なアイデアを持っている学生も多くいましたが、それを実現するにあたって人との繋がりが希薄であることで実践に移すことができないのではないかと感じました。

このような観光教育を大学生に留めず、より多くの人に認知してもらう活動を教育関係者に提案しています。例えば、小中学生を対象に授業を行うことで、まずは自分達の地元に対して純粋に興味を持ってもらい、大月市の担い手を育成する第一歩を築くことができるのではないのでしょうか。今回コロナウイルスの影響で、オンラインでの講義が主流となり、教育に関して改めて考える機会になったと思います。私たち学生もオンラインでの講義を受け、教育や講義体制、自分達の学習方法について考える契機となりました。その中で、普段関わる事がなかった人でも、学科や学年の垣根を越えて交流をすることができる機会となりました。物理的には遠いけれど幅広い人と触れ合えるということがオンラインで行った講義の利点でないかと感じました。また、実際に学びの場所に行けなくても学習できることがわかりました。さらに、学びの場においての自分達がコロナ後にやりたいことを、行動に移すためのプロセスについて深く考える時間を多く持つことができたのではないかと思います。オンライン講義を通して、受けた側だからこそ感じた興味を引く講義や学生が受けやすい講義が分かりました。その自分達の経験をこの観光教育に活かすことができるのではないのでしょうか。しかし、今後の動向はまだわからないため、状況に応じてやり方を変えつつ、そこを含めて企画を考え、有意義



“人とのつながり”



コロナ禍でのオンライン講義

- 自分たちの学習方法について考える機会
- 幅広い人と触れ合える
- 学びの場所に行かずとも、学習できる
- 行動に起こすためのプロセス

認知度を高める

知ってもらう機会の 創出

な教育ができる場を作っていきたいと考えております。

また、大月市の観光をより発展させるために、認知度を高めていく必要性とコロナ禍で人に会えない時であるからこそ、まずは知ってもらう機会を作ることが重要であるということを考えました。そこで、調整中の企画ではありますが、大月市のイメージを持ってもらうために、イベントや長期的な観光PRのシンボルとなるロゴマークを作っていこうと活動を行っています。さらに、来年度には山梨で開催される桃太郎サミットで、私たちの企画を絡めながら、活動に携わっていきます。先に述べたように、人とのつながりを広げていくきっかけとしてこの活動に大月の人たちだけに留めず、全国の人と関わりが持てる契機作りができればいいと考えています。今後も地域の人たちと協力し、この大月市を発展させる基盤を築いていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

全国の人と関わりが持てる
契機作り

大月市を発展させる基盤

ご清聴ありがとうございました

【榎平コーディネーター】

はい、小林さん永田さんどうもありがとうございました。二人の報告ですが、当初大月あるいは近隣の市町村からの出身にもかかわらず、なかなか大月の魅力だとかこういった伝説があるということを全く知らなかったという、そこから始まって地域の人たちと連携をしながらさらに学生同士でさまざまなアイデアを出し合いながら、こういう取り組みに繋がっていったと、一言でいうと地域の魅力あるいは地域支援というのを一つのストーリーにしていく、物語を作っていく、そういうことを通じてより地域の魅力というものを多くの人に知ってもらうようなそういった取り組みをしながら、地域の人たちにあらためて地域のすばらしさに対しての誇り、地元愛という言葉を使って表現されていましたけど、そういったものを育んでいくことが大事だとそういったお話でした。皆さんこういう取り組みをしてみて物語を視覚化して行く、こういうことを通じて皆さんはこういったものをどういうふうにこれから活用していきたいと思っているのか、誰に知ってもらいたいと思っているのかその辺のお話をちょっと聞かせていただきたいのですけれどもいかがでしょうか。

【発表者 小林 氏、永田 氏】

私は、大月出身なのですが、こういった物語を知らなかったということもあって、まずは大月市の人にこういった物語があることを知っていただいて、そこから大月市の観光発展として桃太郎の物語を広げていきたいと考えています。そのあとに、大月市の人だけではなく、全国の人に大月市の魅力を知ってもらうために、こういった活動をこれから行っていきたいと考えています。

【榎平コーディネーター】

なるほど、大月出身の小林さんも知らなかったということで多くの市民の方が知らないと思うのですが、こういうことを地域の魅力だとか歴史や文化なかなかこれを知らないうちに地域の外に出て行ってしまうという若い人たちが多い中であらためて地域の良さというものをストーリーにしていく。そして、それを多くの人に知ってもらうこういった取り組みは非常に重要だと思います。小中学校との連携も始めているとのことでしたので、ぜひそういうこれから大月から場合によっては出て行ってしまいそうな人たちに対しても魅力を知ってもらえるような、そういった取り組みに繋がってほしいと思いました。どうもありがとうございました。

それでは、最後のご報告ということになります。大月市の部長でいらっしゃいます坂本和彦さんからグリーンワーケーションということで、この言葉もなかなか耳なじみがないわけなのですけれども、先進的な大月の取り組みとして全国に評価されつつある取り組みについてお話をいただきたいと思います。坂本さんよろしくお願いいたします。

『二拠点居住とグリーンワーケーション』

大月市役所産業建設部長

坂本 和彦 氏

【発表者 坂本 和彦 氏（市産業建設部長）】

私は大月市役所産業建設部の坂本と言います。よろしくお願いします。

産業建設部は、道路や橋、住宅の建設、下水道などのインフラを整備する部門と農林業や商工業、観光など地域の賑わいを興すための取り組みをしている部門であります。今日は、「見詰め直そう地域の力」ということで、今後のまちづくりについて紹介、提案していきたいと思います。また、先ほどまで発表された藤井さんの地域活動、小林・永田さんの桃太郎のお話、務台さんの農業を通じての魅力発信・二拠点居住など市としても非常にありがたい発表でしたので、お礼を申し上げます。

私のテーマである二拠点居住とグリーンワーケーションについてですが、二拠点居住については数年前からいろんな場所ですでに使われるようになりました。先ほども紹介がありましたが、グリーンワーケーションは大月独自の考え方でワーケーションというのは最近よく言われるワークとバケーションのことであり観光地で仕事やりますよという隠語ですけども、大月市では豊かな自然を観光資源と見立てて大月に来てテレワークなど新しい働き方をしませんかという提案でございます。コロナ禍を受けて昨年の秋から研究会を始めました。最初に大月市の現状であります大月ばかりではありませんけれども、世の中少子高齢化、労働人口の減少など若い人が都市に流出し子供も少なくなってきました。また、それに伴って空き家や空き店舗、空き事務所が増加しています。同時に高齢化により、農業を継承する方が減って耕作放棄地が増えてきています。これらを解消するために、市としても移住政策として子育て環境の充実や移住に対しての助成金制度などを進めています。また、働き場所、雇用の創出として閉校、廃校した学校を使いながら工場誘致や、また空き店舗を活用するための補助金給付などにも取り組んできています。さらに大月市を訪れる方、観光客を増やす取り組みとして大月 DMO という観光まちづくり組織による誘客にも取り組んできました。

しかし、昨年からの新型コロナウイルスの感染拡大により大きく状況が変化してきました。感染拡大を止めるための緊急事態宣言は昨年の春に続き今年も正月明けから昨日まで外出や移動の自粛が叫ばれていました。また、働く人は会社に通勤せず、テレワークが推奨され、一定の業種ではテレワークが根付いてきて、大手の企業が本社ビルを売却するなどの動き働き方の変化があります。さらに、人が集まることが制限され飲食店の売上やお祭りなどのイベントも中止されることとなりました。特に人口が集

二拠点居住と グリーンワーケーション

コロナ禍における新しい生活様式



グリーンワーケーション大月研究会

大月市の現状

- ・少子高齢化、労働者人口の減少、人口流出
- ・空き家、空き店舗、空き事務所の増加
- ・耕作放棄地など農地の荒廃

これらの課題を解決するために

- ・移住政策（子育て・教育・定住促進等に関する施策）
- ・企業誘致（廃校跡地の活用、空き店舗活用補助金など）
- ・大月DMOによる関係人口の増加

観光まちづくり組織

新型コロナウイルスの感染拡大

緊急事態宣言

令和2年4月7日～5月31日

令和3年1月7日～3月21日

徹底した感染予防 三密回避、消毒

- 外出・移動の自粛と制限
- テレワークの推進
- イベントの制限

東京一極集中の弊害

郊外への分散

中する都心部では、その感染割合が高く一極集中から人が少ない郊外への分散が始まりました。これらの社会の変化を受けて、山梨県はデュアルベースタウン研究会という二拠点居住の在り方を大月市モデルとして研究することとなりました。新聞にもありますけれどもモデル候補となったのは、大月が特急で新宿から1時間という首都圏に近い立地をいかせることで、これからリニアモーターカーが開通した後も山梨県の政策に通じるものがあるのではないかという考え方です。これまで、6回の会議を行い大月市の可能性について探ってきました。グリーンワーケーション研究会というものの発想ですが、大月市としては冒頭に説明しましたこの研究会を発足して大月独自でコロナ過における新しい生活様式を研究することとしました。この中では、都心部を離れ大月のサテライトオフィスなどでテレワークをする人や大月の山や川など、自然を求めてくる関係人口の増加を目指します。フレックスタイム、フレックスプレイスといった自由に好きな時間で働くような働き方の変化にも対応しています。また、これまで都心部のオフィスで働かなければいけないといった状況は変化し、大月が働く場所に成り得ることで空き事務所などの地域の既存ストックを活かしサテライトオフィスとすることで、そこで働きながら登山や釣り、アウトドアなど充実した余暇も過ごすことができること、それによって地域の人々が交流し観光としての経済を回すことによりいくつかの地域課題が解消できることとなります。これまで移住してきた方の意見や感想などを聞くと、大月に来てから気持ちが楽になったという意見も聞いております。利便性の高い都会で働くよりも、人間本来の心と癒しを選べるのが大月の魅力であるということを発信していただいています。具体的には、まず手始めに旧浅利教員宿舎以前先生方が宿泊していた建物があるのですが、そこをサテライトオフィスに改修する計画を立てております。そこは、大月駅から歩いて行けますし、写真のように周囲には農地や桂川がすぐ側にありワーケーションに適した場所ではないかなと考えております。ここをオフィスとして使う部屋の他に寝泊まりや移住ができる居室も整備して、ここをベースに大月の拠点となるよう整備していく予定となっております。さらに、ハード面ではなくソフト的にも整備していかないといろんなことが成功していかないと思います。地域の方も含めた中で市の考え方を説明し、どんな方が来てどんなことをするのがいいのかどんな期待をしているのかなどを共有しながら、地域にも役立つ施設となるよう望んでいます。

もう一つは、もうすでに多くの方が大月に移り住んで来ています。先ほど発表された大月移住者のパイオニアである務台さんを始め、移住してくる方は問題意識や向上心が高く優秀な方が多いのが実際のところで、これまでも新聞などのメディアでも大きく取り上げられ地

二拠点居住（デュアルベースタウン）の推進

首都圏に隣接する山梨県は以前から山梨と東京を行き来し、関係人口の増加や観光客の誘致に向けた施策を実施。

コロナ禍を受けて東京から1時間圏内の大月市をモデルにリニアモーターカー開通後に向けて1時間圏内の山梨県の暮らしを研究していくことを加速した。

グリーンワーケーション大月研究会の発足

大月市が持つ、都心へのアクセスの良さや豊かな自然環境を活かすなかで首都圏と大月の二拠点を行き来しながら新しい生活様式を目指します。

- ・関係人口の増加
- ・フレックスタイム、フレックスプレイス（働き方の変化）
- ・サテライトオフィス、テレワーク（働き場所の確保）
- ・充実した余暇（登山、釣り、アウトドア、農業）
- ・地域交流・観光推進
- ・地域課題への取り組み
- ・心と人間性の回復

サテライトオフィス拠点の整備

旧浅利教員宿舎をサテライトオフィスに改修



大月駅から徒歩圏で、農地や川が近く
ワーケーションに適したロケーション

地域のリーダーとなる可能性が高いことも事実です。先日話し合いをした浅利地区の方々からは、地域がこれで元気になるのではないかなというような期待の声も聞いております。いろんなスキルを持った方が大月に関わることによって、人口問題や地域活性化、農業後継者などの課題解決に繋がる可能性もあります。当然、移住してくる方がすべてそういう人ばかりではありませんので、途中で帰ってしまう方もいることも考えられます。これらのことを理解した上で、今後の取り組みといたしましては、まずは大月を選んでもらうための情報発信、広報活動です。名前は聞いたことはあるけれども、通ったことはあるけれども、大月ってどんなところかよく知らないということを発信していく必要があります。市内の遊休施設の更なる活用の推進です。これも前の農協の施設なのですが、これもまだまだ十分利用できる施設で利用者と所有者、管理している方を市がマッチングして活用を進めていけないかなということを考えております。地域の核となる人材の選定、誰でもいいというわけではなく次に繋げることができる人材、高い問題意識を持って大月を理解していただける方に来てもらえることが大事ななと考えております。地域住民との交流推進と協力体制構築、どんなに優秀な方でも自分一人ではいろんなことがうまくいかないので、まずは地域の方に協力してもらって理解していただく地域と交流しながら両者が良かったなと思われるような形を進めていきたいと思っております。当然、都会に比べ地方大月は不便なところもたくさんありますが、東京にはいつでも行けるという立地があります。それでいて、ド田舎、山と川しかない環境そういうところを好きになってくれる人を探していきたいと考えております。

最後になりますが、私たち大月に住んでいる大月市民が大月の良さや魅力を再認識することが、今人を呼び込むチャンスだと考えております。以上で私の発表を終わります。ありがとうございました。

地域との交流・課題の解決



移住してきた若者の活躍

- ・地域住民との話し合いによる事業の取り組み
- ・施設利用者への期待
- ・地域課題への取り組み

今後の取り組み

- 大月を選んでもらうための情報発信、広報活動
- 市内の遊休施設のさらなる活用、利用推進
- 地域の核となる人材の選定
- 地域住民との交流推進と協力体制構築



東京に近い立地と豊かな自然、人情味あふれる地域性など地域の魅力を最大限活用して多くの移住者、関係人口を増やしていきたい。

【榎平コーディネーター】

はい、坂本さんどうもありがとうございました。

坂本さんのお話、大月モデルと言われているんですね。自然環境の良さというものを全面に打ち出して都市住民を招き入れていくと、一方でその整備も十分進めている課題はありつつも準備が進められていると、こういった非常に未来志向といいますか、将来を展望した取り組みとして非常に評価されているのだと思います。その中でも、特に象徴的な言葉として誰でもいいわけではないと、これからは大月が来る人を選ぶというそういったある意味で地域の魅力を認識した上での誇りというものを強く感じるようなお話がありました。高い意識を持って大月をよくしたいそういった人にぜひ来てもらいたい。そのためには、さまざまなサポートをしていきたいとそういった決意もお話として伺えたというふうに思います。そういったところで、坂本さんのお考えということになるのでしょうかけれども、具体的にどういう人材にあるいはどういう企業にこの大月に来てもらいたいと思っているか、こういったところをターゲットにしていきたいのか、考えがありましたらお聞かせいただきたいと思いますと思うのですが、いかがでしょうか。

【発表者 坂本 氏】

ありがとうございます。先ほど務台さんのお話にもありましたが、やはりいろんなことを発信していくと価値を理解してくれる人って必ずいるという考え方に基づいております。務台さんも典型的なパイオニアですけれども例えば農業をやってくれる人、観光です。大月は自然体験ができるような観光地がありますので着地型観光を進められる方、もう一つは田舎にとって IT とかデジタル化ってどうしても遅れ気味です。例えば、高齢者に対してそういうことを進められる方みたいな企業を今は考えていて、実際にそういう方からも少しお声がかかっています。なので、今市が困っていることを実際に課題として取り組んでいただける方を探して行きますし、広報していきたいと考えております。

【榎平コーディネーター】

はい、ありがとうございます。

やはり、大月の価値というものを伸ばしていってもらえるようなそういう人材なり、あるいは企業を積極的に誘致していきたいと、そういったお話だったかと思います。そのために、後の議論にもなりますけれど、大月の良さって何だろうか大月の他にはない魅力って何だろうかってことの再認識から必然的にどういう人が大月に相応しいのかということに繋がっていくのかなというふうにお聞きしておりました。どうもありがとうございました。

■ ディスカッション

【榎平コーディネーター】

それでは、皆さん方に再度お集まりをいただきまして、これから第二部といいますか皆さんに私の方からいくつかの問いを投げかけまして、その問いについてそれぞれのお立場から話をいただきたいというふうに思っております。討論のテーマということで掲げさせていただいております今回の推進大会の非常に大きなテーマということになりますけれども、このコロナの下で人の流れが制限されていく、そういう状況の中で、地域経済は非常に大きな影響を受け、あるいは地域住民の方々もしたいこともできないとこういった状況に置かれているわけなのですけれども、あらためてこれはある意味で自分たちの内面、地域というものの本質、こういったものを見つめ直すそういった機会になるのではないかと考えております。まあ、明けない夜はないと言いますが、必ずこのコロナの暗闇というのは必ずまた朝が来るわけです。それに向かって今こそ地域の底力を蓄えながら、しかも可能な範囲地域の人びとと繋がって行きながらその協力も得ながら魅力的な地域を作っていく。こういったことが今こそ求められているのだろーうと思います。何もしないという選択肢はあり得ないわけです。事実今皆さん方からのご報告があったようにさまざまな取り組みがすでになされているわけです。こういったことを進めていく上で、何が必要なのだろうとかそういうことを考えて行く。その上で、私の方から三つ質問を出させていただいたわけです。

まず、一つ目です。皆さん方からもあらためてお話の中であったかと思えます。一つ目の問いということになりますけど、あらためてこの大月の魅力とは何なのかということです。一方で逆に弱みは何なのかというところですね。大月の魅力を発信していくことあるいはその魅力に多くの人材を引き付けていくということ、これが必要だというお話は多くありましたけれども、一方でさまざまな課題もあるわけです。そして、その課題を解決していくために私たちがしなければいけないことだとか、あるいは地域の外の人を力を借りていくことこういったことがあるわけです。というわけで、この大月の魅力、強みは何なのか、一方で弱みは何なのか、これをそれぞれのお立場からお話を聞かせていただければと思っています。

また、二つ目です。そういった魅力を多くの人たちに共有していく、このプロセスというのはもちろんいろんな形があるのですけれども、やはりこの学び合いということが非常に重要なことだと思っています。今回も生涯学習という地域社会で学び合う場をどう作っていくのか、これが一つのテーマになっているわけなのですけれども、特にこのような状況の下で地域の中の人とそして外の人これらが学び合っていくことが、どうやったらそれを進めていけるのかということ、学び合う場をどう作っていったらいいのかについて、ぜひ皆様方のお考えを聞かせいただきたいというふうに思っています。

さらに、三つ目です。今度はそういった学んだことを活かしながら実際に行動していく、地域の中の人さらに外の人が地域づくりのためにコラボレーションしていく、実践していく場合に地域の外の人を持っている強みだとか、さらにはスキル技術、こういったものをどうやって活かして行ったらいいのか。抽象的かも知れませんが、地域の中だけではなくて外の人たちとの協働を進めて行く上でどういった形で連携していったらいいのか。これをそれぞれの活動の取り組みの中からはぜひお話をいただきたいなというふうに考えています。

以上、三つの問いについて、ぜひ皆様方からの発言をお願いしたいというふうに思っておりますけれども、まず大月の魅力は何かさらに弱みは何かということについて、皆様方からの

発言をしていただきたいと思うのですけれども、この第一の問いについて、それぞれご報告の順番でお聞きしていきたいと思うのですけれども最初に藤井さんいかがでしょうか。

【発表者 藤井 氏】

はい、大月の魅力ですか。私自身メリーの会を11年やっておりまして、皆さん本当人情深いです。でも自分から進んで前に出るということはしないのです。なので、誰か先頭に立って何かやるからと言って話を進めて行って、私が結局リーダーになってしまうのですけれども、トップに立つ人間がいればそれに協力する人はいるので、その部分を各地域によってサブリーダーというものを探して行けば、地域力というものがつくりあげられるのではないかなと思います。逆に、自分が先頭に立ってしまうと世間体、地域性、そこが田舎だと思うのですけど、自分から先に行くとしゃばりだとかそういうことを気にする方が多いので、私なんかは仕事が半分大月、半分東京で通っているのであまり人の噂とかそういうのを気にしないタイプなので、逆に私はまったく問題がないので今こう言う立場にいるのですけれども、お願いしたら嫌という人はいないです。逆に、情が深いです皆さん。すべてコーディネートは私がやらなければいけないのですけれども、それに対しては市民の皆さんは意外に協力的だと感じます。

【榎平コーディネーター】

魅力も弱みも人に関することでした。さすが、深く地域の方々と関わっていらっしゃる藤井さんならではのご発言かなと思って聞いておりました。やはり地域のある意味で悪いところ、出る杭は打たれるみたいなそういうこともよく聞かれます。そういう地域のしがらみというものを、どういう形でこう解きほぐして行くのかといったところが一つひとつの取り組みにきつと求められているところだと思っております。

それでは、務台さんいかがでしょうか。

【発表者 務台 氏】

はい、そうですね。都心から近くこれだけの自然があって僕にとって里山なのですが、そういう環境というのはそうそうないかなと思っています。リモートワークが中心の企業にとっても、ぜんぜん住んでもなんら仕事に支障がないような状況になってきており、正直大月の方が東京よりネットの回線が早いとか、こういうことになってもそこら辺が魅力かなというふうに思っております。その反面、弱みでもあると思うのですけれども、僕はもともと近いので、そんな近いところだったら皆さんそういうよそ者にも慣れているのかなとちょっと思ったのですが、そこがやはり一番ギャップがありました。私の実家は、長野県松本市ですけどそっちだと移住というのが普通にあたりするので、慣れていないと人見知りされたりとか、こっちからあいさつしないといけないとか、そういうところが意外な印象を受けました。そこら辺の印象が変わると初めてくる人とかの印象が変わるのかなと感じます。

【榎平コーディネーター】

多分、大月はそれこそ東京にも近いので、ある意味で恵まれているところがあると思うのですよ。それがきつと魅力、務台さんがおっしゃるところの魅力だと思うのです。決して、何とか来てもらわないと地域が無くなっちゃうとか、そういう危機感がそれほどあまりなかったとそういった地域なのかも知れません。そうすると、地域の外の人たちとコミュニケー

ションを取らなくてはいけない、ぜひ地域に来てもらわなくてはいけないという、こういった切迫感がないなかで、結果的になかなかよそ者の人たちとの付き合い下手と言いますかそういった状況なのかというふうなことでお話を聞いておりました。そういったなかで、垣根を取り払って行くことについて先ほどお話をいただいたというふうに思います。

はい、学生諸君どうでしょうか。小林さん永田さん、大月の魅力は何だろうか、それと弱みですこれをどう皆さんは捉えていらっしゃるかお聞かせいただきたいと思います。

【発表者 小林 氏、永田 氏】

私たちは、桃太郎伝説とか観光っていう視点から考えた時に、まずその大月桃太郎伝説っていうユニークな物語があるってことが魅力だと感じていて、観光施設とか観光地っていう形じゃないのですが、物語ってことでプロモーションの仕方とか、いい多様性があると感じているので、まずそこが魅力かなと思っています。逆に弱みとしては、私たちの先ほどの発表にもあったように、大月を通る人は富士急行線があったりして多いと思うのですが、立ち寄る人は少ないのかなと感じていて、そういった点で、今後駅などに桃太郎伝説が大月にはあるっていうことが一目でわかるようなものだったり、そういった観光推進の仕方があるのではないかなと考えております。

【榎平コーディネーター】

そうですね。人の流れは非常に多いところなのですけれども、そこでこう立ち止まる人、あるいは駅前で目的を持って立ち寄る人はなかなかいないという、そういったわれわれも実感しているところです。そういった中で、地域の資源というものをどう作って行くのかについて、またこれから議論して行きたいというふうに思います。

坂本さんいかなのでしょうか。先ほどお話いただいたところと重なるかも知れませんが、お話をいただければと思います。

【発表者 坂本 氏】

まず、魅力の一番は皆さんも言っていますが、都心に行ける立地近い所だと思います。昔から交通の要所と言われて富士山に行くのも便利だし、長野方面行くのも便利だし、東京に行くのも便利。ハブと言っていますが、そういう機能を使うことがいいのではないかなというのが魅力だと思います。自然も当然魅力なのですけれども。弱みと言うと、今までは東京に近いがために、皆さん東京に行ってお勤めして戻って来なくなってしまう。向こうに住んでしまう、そういうのがあったのですけれども、その辺がコロナ過で少し事情が変わってくるのではないかなというふうに考えています。もう一つ考えている弱みは、空き家は多いですけど移住して来られる住宅が少ないです。よく聞かれていて、どこか住めるところはないのですか。という話はあるのですが、そこは移住者を受け入れる方として弱みになる。

【榎平コーディネーター】

その空き家がなかなか活用してきていない原因というのはどうでしょうか。

【発表者 坂本 氏】

やはり、子供が一回東京に出てしまっただけで両親が亡くなって空き家になってしまう。けれども、すぐに帰って来られるので仏壇があるとかでお家は管理しているような空き家がど

うしても多いので、そこを人に貸してくれないっていうのは、たぶんあると思うのです。それは近いがためにあると思うのです。

【榎平コーディネーター】

はい、ありがとうございました。

非常に全国の空き家問題に関わるようなお話でした。続いての論点ということで、今度はぜひ学生さんにまずお話をお聞きしたいなと思うのです。地域の中の人と外の人考え方も違うだろうし、これまでの生き立ちも違う、こういった多様性を持った人たちが学び合っていく場っていうのを市の中にどう作って行くのか。これが一つこれからのポイントになると思うのです。というのはこういった学び場で異色の人たちが出会って、そしてそこで新しいものが生み出されていくというこういうプロセスを作って行くことってこれからの地域づくりにおいて非常に重要だと思うのですけれども、まず学生のお二方に聞いてみたいです。この地域の中の人と外の人がどう学び合うのか、そういった場をどう作って行くのかその辺についてお考えを聞かせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

【発表者 小林 氏、永田 氏】

やはりコロナ過において注目されてきたオンラインというものが、一番いいのではないかなという考えでいます。私たち学生も実際にオンラインでの講義を通して行ったり、先ほどのプレゼンテーションの方でも述べたように大月短大の学生さんに向けてもオンラインでの講義を行うことができたということで、気軽に参加することのできる学びの場を作ることが、第一になるのではないかと考えています。また、地域の中の人と外の人との学び合う点において、いざ学んでくださいとひとと言っただけでもやはり難しいと思うので、共通認識というものを例えば私たちが山梨県立大学生としたら桃太郎を今テーマに活動を行っている面もあるので、桃太郎をテーマにして外部の人と学び合う機会を作ることが必要になるのではないかと思います。

【榎平コーディネーター】

テーマづくりってどこですよ。学ぶってことはもちろんいろんな興味関心について学ぶってこともありますけれども、一つの目標を決めてその目標を達成するためにどうしたらいいのか、目的を決めてそこまでどうやって到達していったらいいのかそういう学びの仕方もあるというふうに思います。そういった意味で地域づくりというのは、まさにみんなが共通する目標到達点これは何なのかそれを明確にしながら、それに向けてどういうふうなステップを踏んでいけばいいのか。こういうふうなことを考えて行くと、今話していただいたような共通認識を作るというのは、非常に重要な一つのステップではないかと思います。オンラインの話が出ましたが、務台さんはオンラインで農業の匠からさまざまなことを学び、学ぶ場を作っていらっしゃるお立場からどういったことをお考えになられますか。

【発表者 務台 氏】

まさに今、言っておさったことがすごく重要なかなと思います。テーマをもう少し深掘るとたぶん関心ごとみたいなところをうまくマッチさせたいと思っていて、田んぼやるのも無農薬でやりたい人をピンポイントで見つけることで、結び付きがすごく強くなるそれがまた独自性になると思います。今コスプレなんかみたいな他にはない独自性としていいじゃないか

なと思いますし、また人を連れてきてくれると思うのですよ。みんなどんどん集まってくるのが理想的だと思いました。

【榎平コーディネーター】

テーマは細かければ細かいというか、より尖がっているテーマの方がきっと共通認識が作りやすいというきつとそういうことだろうと思います。それは、地域に関わることであればあるほどより深い学習ができるのではないかとそういうふうにお聞きして思いました。特に子育て、しかも小学生、中学生みたいなこれからの地域を担っていくそういう意味での学び合いです。地域教育と言ってもいいのでしょうか。そういった視点から藤井さんいかがでしょうか。

【発表者 藤井 氏】

私自身メリーの会で、夏休みなんかは東京からお子さんを呼びまして、大月の子供たちと一緒に交流しまして、防災教育の体験など交流は持っているのです。コロナ過におきまして、東京で無農薬野菜栽培をしていて来られなかったですけれども、今年度からはエコの里の農園の方に東京からこちらに来まして、大月の子供たちと一緒に合流しまして、いろいろな農作物とかを作って行くっていうことを今年はやっています。農業体験なんかを東京の子と大月の子と大月に住んでいるから必ず農業ができるかって言ったら、私もまだ農作業二年目です。なのでこうゆうことで交流しながら農業体験とか学び合うことをやって行く予定でございます。

【榎平コーディネーター】

どうでしょうね。そうやって都市から来た子供たちと大月の子供たちが同じ学びをするってことによって、何かこう生まれてくるものってあるのでしょうか。

【発表者 藤井 氏】

東京の子たちの方が体験不足ですよ。大月の子たちの方が土に触れている子が多いのかなと思いますけれども、大月の子供たちも今ゲームの方に夢中になっているので、畑仕事をしていてもちょっと目を離すとすぐゲームに取りつかれて、東京だから大月だからっていうふうではなくみんな子供たちは同じですよ。

【榎平コーディネーター】

ありがとうございます。坂本さんいかがでしょうか。

外と内が学び合う場っていうのは、どういうものとしてイメージしていけばよろしいでしょうか。

【発表者 坂本 氏】

オンラインとリモートでお話し合いができるとかそういう話がありましたけど、私が考えているのは実際には外から来た人とイベントを作り上げてとかですね。今、浅利教員住宅で考えているのは、地域のことをもうちょっと外から来た人も中にいる人も一緒に知りましょうみたいなツアーを作ること考えています。直接、人と人が触れ合うことでこんなことがありますっていうような新しい勉強をしていきませんかという方向を考えていま

す。人間同士っていうところもやれたらなと思います。

【榎平コーディネーター】

まさに同じ場でこれから生活していこうという、そういう思いのある人とそれを受け入れていく、いろいろな不安もありながらそれを受け入れていくような人びとがリアルで学び合える場ってというのは、まさにこれは単なる同じものをみて学ぶってだけじゃなくてそこで交流を深めていく場にもなるのでしょうか。学びの目的っていろいろあると思うのですが、やはりそういう学びの場を通じて交流していくってことが結び付けていくってことが特に重要な役割だったと思いますし、都市農村交流、こういったものも含めて学びを通じて交流を深めていくということは、非常に重要なのかなって思います。ありがとうございます。

それでは、三つ目のところですね。地域の中の人と、外の人がコラボレーションしていくときに、地域の人が持っている強みやスキルこれをどう活かしていけるのかちょっと抽象的なので、皆さん方の取り組みの中からこういうことがあったよとかこういう形で役に立ったよとか、あるいはこういう人に来てもらいたいよってというようなことがあればお話しいただきたいなというふうに思います。これについては、先ほど坂本さんがお話しいただきましたのであらためてもう一度繰り返しになるかも知れませんが、市としてのお考えを聞かせていただきたいと思いますけどいかがでしょうか。

【発表者 坂本 氏】

具体的に今旧教員住宅を整備したなかで、今考えているのはできるだけ地域の人と外から来た人が触れ合えるようなところ作りましょうということで、庭というか屋外スペースに交流みたいなスペースとか、縁側みたいなウッドデッキを作ろうということを考えています。顔見ただけだと話しができないので、最初は市がちょっと仲介しながら顔合わせをするとかそういうことから始めて少しずつ繋がりを作ってもらえないかなと考えています。

【榎平コーディネーター】

まさに、垣根を取り払っていく具体的な方法だと思いますね。そして、これってきっと新住民の人たちに対してだけではなくて、やはり一般市民の中でもそういう先ほど地域防災の話もありましたけれど、やはりそういう場を作って行きながら市民同士のコミュニケーションを活性化して行くってことがきっと強い地域づくりに繋がって行くのかなというふうに思いました。ありがとうございます。

この辺どうでしょう、学生のお二方なかなちょっとイメージが付きづらいかも知れませんが、考えがあればぜひ聞かせてください。

【発表者 小林 氏、永田 氏】

そうですね。山梨県立大学では桃太郎ってものをテーマに扱ってきたので、桃太郎ってだけでも県外の方ではプロモーションの見せ方とか捉え方というものが違ってくるっていうことがあって、だからこそ新しい視点を取り入れることができるのではないかっていうことを感じました。私たちの活動の中で、観光教育とか今後、ロゴなどを扱って行きたいと思っているのですが、その点でも私たちだけでは、普段教わる立場なので教えるってことに関しても知識が必要ですし、ロゴをデザインするにあたってデザイナーとかの人にも協力をお願いしたいと思っているので、そういった面でも私たちにはない地域の外の人の強みを活か

す場になるのではないかと考えています。

【榎平コーディネーター】

そうですね。やはり、自分たちだけでとにかくできることは何なのか、やって行くなかであらためてこういったところをぜひ専門家だとか、スペシャリストに学んで行きたいとそういうことになっていくかと思うのですよ。まず、自分たちでできることに取り組んでいくなかで課題が見つかっていく、そしてそれが外の人を力を借りてコラボレーションしていくとこういった繋がりが見えていくのではないかなというふうに思います。

藤井さんどうでしょうか。この辺もやはり藤井さんは非常に苦心されているところだと思うのですが、お考えを聞かせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

【発表者 藤井 氏】

大月市にお嫁に来たお母さんたちがいるのですけれども、桂台を買う方が多いのですけれども、大月の教育が東京とか横浜からお嫁に来たお母さんたちっていうのは、物足りないっていうことで幼稚園まではいるのですけど小学校で戻ってしまう。メリーの会をやっている11人の中で、やはりお友達が出来辛いことでメリーの会に入会するお母さんたちが多かったのですけれども、中では才能があるお母さんたちが大変多かったので、メリーの会の英会話教室とか絵画造形教室とかあとカルチャースクールを最近鳥沢の古民家で始めたのですけど、みんな他市からお嫁に来てくれたお母さんたちが地域の方々と仲良くなりたいってことで生徒さんは全員地域の方なのですけれども、講師はお嫁に来たお母さんたちなので大月出身はダメなのってことで、今講師の人は一人か二人は大月の人に入ってもらっていますけれども、そんななかで地域づくりってものを活かしてお嫁に来てくれた人も大月で楽しいっていうか地域の人たちと仲良くして子供たちとの関係を深めていくことは結構長いことやっております。

【榎平コーディネーター】

まさにメリーの会っていうのかな、藤井さんの取り組みの真骨頂ですよ。実はお嫁さんっていうのは外から来て、そして大月に住んでくれる、そして一番大事な子育て、人材育成を担ってくれている、そういう人だからこそ子育て支援って非常に必要だし、しかももともと地域にいた人じゃないからなかなかコミュニケーションを取りづらいと、こういった人たちへの支援の在り方それに取り組んでいるメリーの会の重要性があらためて認識できました。ありがとうございます。

それでは、最後務台さんからまさに地域の外の人のお考えを聞かせていただきたいと思います。のですけれども、いかがでしょうか。

【発表者 務台 氏】

少し視点が変わってしまうのですが、どうやったらうまくコラボレーションできるかってところも必要かなと思っていて、当たり前ですけど地域の方と外の人間違うとこで育ったのだからそれぞれ違う提案があって、よくあるケースとしては外の人が地域に来るともってこうしたらいいのにみたいなことはいろいろ思いつくので、まず言うみたいなのところがあると思うのですよね。それはもちろん外の人のもっとこうした方がいいのにと心から思っているのですけど、でも僕もそうだったと思うのですけど、地域の中にいるとそうは言う

けど人はいないし、お金もないなかでどうやるのみたいな結構おそらくそのケースが多いのではないかと考えていて、それが平行線のままなかなかコラボレーションに繋がらないみたいなケースが多いのかなと考えております。重要なのは外の人には実際に実践するしか地域の感覚って理解できなくて、僕自身もいろいろとこうしたらいいのにと考えていましたが、ここに来て毎日草刈りとかですね、そういうことを身に染みてわかるようになるほどと思うのです。やっぱりやってみないとわからないことがあるので、そういう時に何度か体験してもらったりとかやれる環境を作ってあげるのは、お互いの理解のためにも必要になるのかなと思ったりもしています。その辺が課題かなというふうには考えております。

【榎平コーディネーター】

はいありがとうございました。皆様方から、私からの問いに答えていただきました。

■ 講評

【榎平コーディネーター】

最後に、私から講評と言いますかそれはちょっとおこがましい話ですけど、今の皆様方のお話を聞いて思ったこと感じたことを少しまとめてみましたので、お付き合いいただきたいと思います。

テーマとしては、「今こそ地域づくりの土台を積み上げよう」ということです。コロナの状況の下で、今何ができるかこれをあらためて考えて行こうと、こういうことを皆さん方に少しお話をしたいと思っています。まず、よく言われるのがコロナによって地方の時代が来るのではないかというふうに考えている方が実は多いということです。例えば、人口が都市から地方へ向かっていく、そして大企業の本社が地方に移転してくる、これによって地方が活性化するのはないかこういう考えがよく言われています。しかし、これってというのはある意味で幻想であると私は思っているのです。なぜかという、コロナが都会で蔓延して人口が地方に向かってくるのかあるいは企業が積極的に移転するかというとそんな簡単なことではないと思うのです。というのは、具体的にみてみま

すと実は令和2年、去年です。コロナが蔓延して一年間実は東京の人口っていうのは減っているのかというと決して減っていない、実は増えているのです。8,600人増加ということになっております。そして、その内訳を見ると社会増、東京以外の所から東京に人が来るこれによって人が増える状況を社会増と言いますけどこれが

30,000人、そして自然減というのがこれは人間も生き物ですからだんだん

とこう死んでいってしまう自然に減少していく、これは高齢化によって人が亡くなっていくとこういうことです。差し引きで実は東京で8,600人、人口が増えているのです。しかも、首都圏の不動産の価格っていうのは、以前として上昇し他の地域には見られないそういう不動産価格の状況を呈しているわけです。さらに、大企業にとってみれば地域の拠点というのは、本社機能ではなくて組み立てをするあるいは部品を作るこういう一部の工程を担うよう

＜討論のテーマ＞

コロナ禍において人々の交流が制限されているなかで、地域住民が内発的な力を蓄えつつ外部人材と協力しながら魅力的な地域をつくっていくためには何が必要か？

1. 大月の魅力は何か、逆に弱みは何か？
2. 地域の中のひとと外のひとが学び合う場をどう作り出していったら良いか？
3. 地域の中のひとと、外のひとが地域づくりのためにコラボレーションする場合に、地域の外のひとが持っている強みやスキルをどう活かせるか？

今こそ、地域づくりの「土台」を積み上げよう！

2021年度 生涯学習推進大会によって
大月短期大学 榎平龍宏

コロナ禍で「地方の時代」が来るのか？

人口が都市から地方へ向かい、大企業の本社も地方へ移転することにより、地方が活性化する？



それって幻想です・・・

コロナ禍で「地方の時代」が来るのか？

- 令和2年の1年間で、東京は**8,600人の増加**（社会増29,618人、自然減18,537人）
- 首都圏の不動産価格は依然として上昇（近畿圏・名古屋圏は横ばい）
- 大企業の地方拠点は、非正規社員や外国人労働者を雇用する一部工程を担う工場のみ
- 話題になったパソナも「本社機能の一部」の移転のみ

な、そういった工場が地方に移転されてきている場合が多いわけです。そういった中で働く人たちは、非正規社員だとか或いは外国人労働者こういった人たちが一般的なのです。しかも、賃金としてはどうしても安いという状況です。また、一時期話題になりましたパソナという人材派遣会社が淡路島に本社機能の一部を移転するというのが話題になりましたけれども、あくまでも本社機能の一部であって本社そのものを移転するわけではないのです。そして、淡路島はパソナにとって非常にゆかりの深い土地でしてパソナが持っている農場が実はあそこにあって、そこを拠点として一部を移転するのみこういった形で現実的には動いているわけです。あくまでこれはコロナで地方がこれから活性化するとは安直に言えないということは、こういったものを見るだけでも明らかだと思います。

いわば他力本願ではなくて、これは地域自身が自分たちで考えていかなければいけない、そういったことが今まさに必要だということなのです。その具体的な考え方としては、どうしたら大月というのを住みやすくしていくことができるか、さらには働きやすい地域にすることができるのだろうか、また一人ひとりの市民が輝く地域やりたいことができ、そして夢が叶うそういった地域にどうやったらしていけるのか、大月というものをこういう地域にしたいという夢が必要、そしてその夢を目標にしてそれに向けてどう行動したらいいのか、こういったことが今まさに地域づくりとして求められているというふうに考えています。そして、そういった活動を通じて学生諸君からもワードとしてありました地元愛、この言葉言い換えればその地域に住んでそして誇りを持っている、まさに自分の存在というものを確立していくアイデンティティとしてこの地元愛というものを捉えることができると思うのですけれども、この地元愛が強いそういった人たちがたくさんいる地域ほど外の人から見た場合に、その地域ってきっと魅力的に見えるだろうというふうに思うわけです。だから、地元愛を持つ人をいかにこれから育てていくのか、これが地域づくりにとって重要だし地域の外からの人を招き入れて行く上で大前提だというふうに考えております。そして、そういう地域っていい人材が育つし、そして集まるということこれは当たり前ですよ。その地域において、愛着を持つ人がいないような地域に人が残るわけではないですし、さらには集まるわけ

がないです。その地域に誇りを持つ人がいかに増えていくのか、これが人を引き付けることにも人が残る地域というものにもなっていくというわけです。そういった地域をどう作っていくのか、これは地域というものがこれから大きく変化して行かなくてはならないとまず思うわけです。これまでの地域の在り方から、いわゆるイノベーション地域が変わっていくことこれが必要なのですけれども、地域が変わって行く上ではまさに一つの考え方、あるいは

「他力本願」ではなく、まずは地域自身で考えよう！

- ▶ どうしたら大月市を住みやすく、働きやすい地域にすることができるだろうか？
どうしたら市民一人一人が輝く地域を作っていけるだろうか？
- ▶ 「大月をこんな地域にしたい！」という夢を語り合い、それに向けて行動しよう
(バック・キャストイング)
- ▶ 「地元愛」(アイデンティティ)の強い人々が多い地域ほど、外からは魅力的な地域に見える！

魅力的な地域には、いい人材が育つ・集まる！

- ▶ 「誇り」(郷土愛)を持たない地域に、ひとが残るわけがない／集まるわけがない
イノベーションは「既存知」の新しい組み合わせ(シュンペーター)
- ▶ 「既存知」の距離が遠いほど、ユニークなアイデアが生まれる→地域間交流の意義
- ▶ イノベーションを生む土壌としての多様性(ダイバーシティ)をどう作っていくかが大切！

旧来的な考え方だけではダメで新しい考え方が組み合わさっていく。イノベーションという言葉が最初に使ったのが経済学者ヨーゼフ・シュンペーターという人ですけれども、このイノベーションを起こしていくためには既存知です。これまである既存の考え方、知恵これらを組み合わせていくことが必要だ、それがイノベーションに繋がって行くというふうにシュンペーターは言ったのですけれども、これは地域においても一緒だと思うのです。地域にあるさまざまな知恵というものを組み合わせていくなかで、地域をよりバージョンアップしていく、新しい時代に合わせた地域を作り出していくことが必要だと思うのです。そして、この既存知の組み合わせということを考えた時に、このさまざまな知恵がいわば距離が遠いほど即ち具体的に言えば都市に住んでいる人とその地域に住んでいる人、やはり住んでいるところも違うし考え方違うわけです。そういう、考え方や発想が違えば違うほど既存知の距離が遠いほどそういう違った考えの人たちが集まって、そしてそれぞれの考え方を組み合わせて行くほどユニークなアイデアが生まれてくるというふうに言われているわけです。例えば、Apple の iPhone あれば電話というものとパソコンというものの、ある意味でそれまでは全く違うものとして捉えられていたパソコンと電話を組み合わせたわけですね。それによって、iPhone という非常に革新的な商品が生み出されたわけです。そういうふうに、全く異なった物を組み合わせて新しいものを作り出していく、これによってさまざまなアイデアが生まれてくるというふうに考えた場合に、これは地域においては地域と地域しかも異質な地域同士が交流していく、それによって、新しいアイデアが生み出されていく、そういった地域間交流というものの意義を示していると思うわけです。まさにこのイノベーションというものを生み出していく土場、そしてそこでは多様性さまざまな人びとがそれぞれに強みを活かしながら、地域をよくしていくためにどういうことが必要なのかこういったことを考えて行動していく、よく言うダイバーシティ多様性ということです。これを地域の中にどう作って行くかということが、これから非常に大事だというふうに私は考えております。

そして、この地域イノベーションを作り出して行くためには、どういうステップが必要なのかというわけなのですけれども、最初に先ほど皆さんにもお話いただいたような地域の強みだとか弱みだとかあるいはチャンスさらには興味ですね、こういうものをその地域に即してみんなで考えて行く SWOT 分析と言われています。こういったことをあらためて地域住民がみんな考えて行くこと、これが大切だというふうに思います。そういう形で地域の特徴を明らかにしていく上で、非常に重要なのは地域の外

の人視点というものを活用していくことが大切だということです。ここで、鏡効果という言葉を使っておりますけれども、鏡というものは、私たちは自分の顔は自分でなかなか見ることができないわけです。鏡を通じて私たちは、自分の真の姿というものを見ることができるわけです。では、その鏡とは何かというとこれは地域の外の人を借りてそして自分たちの地域を見つめ直すということなのです。これによって、私たちは新しい自分たちの魅力だとか価値というものを再発見できるわけなのです。自分たちだけではなく地域の外の人たちの目を借りながら、地域の魅力というものを見つけていくこれが非常に大事だというふうに

地域イノベーションを創造するためには・・・

- ▶ 地域の「強み・弱み・機会・脅威」を明らかにする (SWOT分析)
- ▶ 地域外の人視点で発見できる地域の魅力も大切にする (「鏡効果」)
- ▶ 「地域の魅力」を磨き上げて「地域資源」を生み出す
- ▶ 「地域資源」+「外部人材が持つ強みやスキル」
=新しいアイデア

思うわけです。そして、その地域の魅力というのは、その魅力だけでほっといたらいつまで経っても活用できないわけなのです。地域の魅力というものをここでは磨き上げると表現していますけれども、よりブラッシュアップして、そして場合によっては商品化していくためにどうしたら良いのか。こういうことを考えていく、それによって初めて地域の魅力というのは、いわゆる地域資源、経済的な活動等に使っていくための資源に成りうるというわけです。ですから、地域の魅力というものを磨き上げていくような取り組み、これは地域の中にいる人たちが協働して不斷の努力を通じて行っていかなければいけないことなのですから、その地域の人たちの地域資源というものを生み出していくこの不斷の努力、これが必要だということなのです。そして、この地域資源というものを外部の人たちが持っている強みやスキルこれと結び付けていく、先ほどの既存知というものの組み合わせに繋がっていくわけなのですから、これによって新しい地域づくりのアイデアですとか発想というものが登場してくる、これがひいては地域の革新性に繋がっていくと、こういうふうに考えることができるだろうというふうに私は考えております。

スタート地点は、ですから実はそこに住む地域の人びとがまず当事者意識、自分たちの地域を自分たちで何とかしたい、よくしたい、こういう意識を持つことが大切だということなのです。これまでの話でも繰り返してきたわけなのですから、まず地域の人たちは自分たちでどうしたらいいのかと言うことを考える。これがまずスタートだというふうに思うわけです。そして、こういったものを育んで行くためには、やはり何と言っても愛郷心、地域を愛する心これを育むということが必要になっていくわけなのですから、この愛郷心を育むということは、まず地域というものについて私たちはそこで生まれて育ったこういった私たちのかけがえのない故郷というものを次世代にどう引き継いで行くのか、藤井さんたちの取り組みに象徴的に表れているような次世代にどう地域というものを引き継いで行くのか、こういった私たち一人ひとりに実は責任があるということ、これを認識することが必要だと思っているわけです。こういった地域に対する責任というものをちょっと重い言葉ですけども育てて行かなければ、きっと自分たちの地域をよくしたいというそういった当事者意識というのはなかなか生まれてこないだろうというふうに思うのです。この当事者意識を育むこと、そして郷土を愛する心これを育むこと、これがまず地域として取り組んで行く必要があることだというふうに考えています。そして、そういった愛郷心を育むことによって私たちは自分たちの地域に誇りを持つことができます。そしてその自分たち地域に誇りを持つことは、実は他の地域に対する尊敬の念、あるいは共感の念こういったものを持つことにも繋がって行くわけです。それぞれの地域に誇りを持った人びとが交流していく、これによってお互いがいいところを認め合いそして高め合っていく、こういういい意味での地域と地域との間の競争、これがまさに真の地域間交流というものの意義だというふうに考えています。そして、誇りを育むということはまさにこれは地域を学び合う、しかも他の地域の人たちも含めて地域を学び合っていく、そして内面から地域を輝かしていく。こういった地域に対して人びとというのは、共感をするしさらにはその地域に対して魅力を感じて、そして最終的にはそこに住ん

地域のことは自分たちのこと： 「当事者意識」を持とう！

- ▶ 「地域について学び、行動すること」は生まれ育った故郷を次世代に引き継いでいくための「責任」→**愛郷心を育むこと**
- ▶ 自分の地域に「誇り」を持っているからこそ、他の地域を敬い共感できる＝**真の地域間交流**
- **人々が学び合い、地域を磨き、内面から輝いている場所に、人は共感し、魅力を覚え、住んでみたい！と感じる**
- 究極の移住促進政策は「生涯学習」の推進**

でみたい、こういったことを感じるのかなと思っています。一足飛びに移住促進というのは難しいと思います。その地域に通っていく務台さんのように通うことから始まって、そしてその地域の人たちの共感をいろんな形で感じつつ、そして最終的には住んで行きたい。こういったステップを作っていくことが必要だろうと、そうなってきますと地域のことを学んでいく、そして学んだことを地域の人たちが外の人たちに発信していく、その起点としての生涯学習というのは、まさに究極の移住促進政策だというふうに言えるのだろうと思うわけです。

最後に、やはり大月というものがこの学びに溢れている、そしてその学びを通じて人びとが地域のことをよく知って、そして誇りを持っている、こういった地域にこそ外の人たちが住んでみたいというふうに思っていく。こういったことが、いい循環として起こっていくような大月市を作っていくことが必要だと思っています。先ほどの既存知の組み合わせということでは、伝統的な産業と新しい価値を作っていく産業、これをどう組み合わせるのかということが、これから一つの新しい産業の在り方を模索していく上で重要だというふうに考えています。農業、健康、こういったものとこれからのある意味で産業の柱になっていく体験型観光これをどう組み合わせるのか、こういった形で新しい産業を作り出していくイノベーションというものを生み出していく、こういったことが大切だろうというふうに思いますし、駅前のレストランの雰囲気があるようなそういった商店街、学びというものを組み合わせて行く、こういう取り組みもきっと可能性を秘めているのだろうと思います。また、先ほどのダイバーシティということでは、世の中がさまざまな経済的な活動があるわけですが、特定の産業に限定せずに工業、サービス、観光、さまざまな産業を組み合わせるようなそういう経済の在り方もこれから必要だというふうに思います。その上では、若者だとかあるいは外部人材が活躍できる街を作っていく必要があると思いますし、坂本部長の話でありました既存ストックをいかに活用していくのか、こういった発想も大切だろうというふうに思います。さらには、学生さんからの報告にありましたように、最大の大月のファンというのはやはり地域住民なのです。何と言っても、その地域に住んでく

さいごに：学びと文化が香り、「住んでみたい」と思われる大月市に！

▶暮らしを豊かにする伝統文化と、産業との融合

- ▶ 伝統産業の創造産業化（農業・健康×体験型観光 など）
- ▶ 昭和レトロの雰囲気を感ぜられる商店街の活性化のための「まちゼミ」開催（学び×体験型観光）

■ 特定産業に限定せず、多様性のある「小さな経済」を積み上げて循環型経済を目指そう！

- ▶ やる気のある若者や外部人材が活躍できるまちにしよう
- ▶ 既存ストック（空き家、空き店舗、廃校、空き工場など）を活かそう
- ▶ まずは足元から！最大の大月ファンは地域住民です→マイクロ・ツーリズムの提唱

今こそ、信頼と協働のまちづくりを！

- 基本理念を「信頼と協働のまちづくり」として、医療環境や救急体制の充実と予防医療、予防介護の充実により市民の安心と安全を守り、また、生まれ育った「ふるさと大月」を愛する心をもった次世代を担う子どもを育て、いつまでも大月に住んでもらい、大月市民のそれぞれの世代が自信と誇りを持ち、生きがいを感じながら助け合い、思いやりを持ち支え合う、そんなまちづくりをめざしています（「大月市第6次総合計画」）

→私たち一人ひとりが、普段の生活で感じていること・仕事の中で感じたことなど、それぞれが持っている経験や知識を共有し、未来の地域の姿を描きながら、いま自分たちでできることは何かを考え、実践すること（フューチャー・デザイン）が求められている

ているわけです。そして、潜在的にはその地域をまず足元からよくしていく、そういう可能性を秘めた人たちなわけです。こういった人たちに大月の良さというものを再認識してもらえるようなそういう観光の在り方、これは最近マイクロツーリズムと言われているけれども、地域住民あるいは近隣の人びとが、それほど長距離で移動しない形で地域の良さを再認識して行けるような、そういった観光の在り方をどう作っていくのか、こういうことが必要

だというふうに感じております。今こそ「信頼と協働のまちづくり」をとということです。このスローガンは、大月市のスローガンなのです。大月市が掲げているまちづくりの基本理念なのです。ここには、大月市の第6次総合計画を抜粋してみました。まちづくりの基本理念を「信頼と協働のまちづくり」というふうに続けて、そしてふるさと大月を愛する心、まさにこれは愛郷心ですね。こういった心を持つ次世代を担う子供たちを育てて行く、そしていつまでも大月に住んでもらえるよう大月市民のそれぞれの世代が自信と誇りを持ち、さらにそこでの生きがいを感じながら助け合う、そして思いやりを持ち支え合うそんなまちづくりを目指したい。大月市は高らかに宣言しているわけです。まさにこれを具体化して行くことが、今こそ求められているというふうに私は思っています。実は、大月市の木これは八重桜なのです。私も初めて知りましたが、この八重桜の花言葉は、理知に富んだ教育あるいは豊かな教養いずれにせよ学びに関わるテーマなのです。こういう木を市の木に選んでいる、こういった大月でまさに今こそ生涯学習の力が試される、そういった時なのだろうとコロナの状況下で、まさにこの学びの力、教育の力というものが必要になってきていると思います。皆さん、今回のこの推進大会の非常に重要なご報告あるいは討論を通じて皆様方にぜひこれからの大月の将来の在り方、それを特に生涯学習というものを通じてどうやったら大月市というものがより魅力的になるのか、こういったことを考えて行く一つの契機として、今回の推進大会を捉えていただければ幸いです。以上、私から皆様方からのご報告を受けて感じたことをお話させていただきました。最後になりますけれども、長時間に渡って報告者の方々ご準備とそして当日のご報告さらには討論とお忙しい中本当にありがとうございました。この推進大会の中身がより多くの市民に伝わり、そして一步を踏み出すそういった契機になれば幸いですというふうに感じております。あらためまして、報告者の4方の皆様方今日はどうもありがとうございました。

大月市の木：八重桜

花言葉は「理知に富んだ教育」・「豊かな教養」



ご清聴ありがとうございました！

